

---

# 恋人代行

植田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋人代行

### 【Nコード】

N9110Y

### 【作者名】

植田

### 【あらすじ】

「恋人のフリをしてもらいたい」。ある事がきっかけで社長から恋人代行を頼まれた倅。社長はまわりつく女性たちを排除したかった。社長はフリを頼んだ相手が、本気の恋に発展しなさそうな相手を探していた。倅はゲームにしか興味がないためうってつけだった。そんな事を言っておきながらも、社長のほうが倅に次第に惹かれていき…。

## 第一話 きっかけ

「よし、終わった」

仕事を終えた倅は立ち上がり、鞆を手に持った。

「ゲームの続きが出来る」

腕時計を見ると二十時を過ぎたあたりだった。帰宅まで歩いて五分、シャワーを浴びて簡単な夕飯で済ませたとしても二十一時前にはゲームを始められる。くふふとにやけながら、エレベーターに乗り込む。

倅は通勤時間が惜しくて、会社近くの安いアパートで暮らしていた。

峯島倅<sup>みねしまがし</sup>三十二歳。ゲームに夢中になり過ぎて恋をする間もなく、気が付けばこの年に。結婚願望のない倅はゲームさえあれば満足だった。いつかは大音量、大画面のテレビでゲームをする事を夢見て、マイホーム資金をせっせと貯金していた。

目標額まで貯金はまだまだ足りないが、ゲームの為に仕事を頑張っていた。

エレベーターが一階へ到着し、扉が開く。早く開いてほしくてうずうずしていた。すり抜けられる程度の間隔ができると、倅は飛び出した。

早歩きで帰れば、十五分はかからない。倅は少しずつ駆け足になっていく。

照明が必要最低限にまで落とされたロビーで、男の後を女が追う姿が見えた。女が男の腕を掴むと、男はその腕を払いのけ、口論が始まる。

痴話喧嘩か。

関心のない倅は彼らを見向きもせず、ロビーを駆け抜ける。が、突然顔面に衝撃を受けた。

「遅かったじゃないか」  
「ほえ」

顔に当たったのは、痴話喧嘩真っ最中の男の体だった。男は倅の肩に手をのせ、耳元で囁いた。

「すまないが、話を合わせてくれ」  
「何よ、その女！」

上品なスーツを身に纏い、妖艶なスタイルを持ち合わせた美女がヒステリックに騒ぎ出す。

「俺の恋人だ」  
「嘘でしょ？ あなた恋人はいないって言ったじゃない」

えええ！？

突如修羅場に放り込まれた倅は動揺した。

これを切り抜ける方法が二択しか思い浮かばなかった。  
？無視して立ち去る。  
？男に協力する。

頭の中がゲーム感覚に陥った。

ゲームだったら絶対に？を選ぶ。その後のイベントが見たくなくなるから。

けれど面倒なことに巻き込まれるのもちょっとな……。

倅は目を瞑り、考えた。

男は困った様子で倅を見ていた。

その表情を見てしまうと、？を選ぶと後味が悪そうだった。選択肢が決まると、倅は男の頬に顔を寄せた。

「ごめんなさい。思ったより時間が掛かって掛かってしまつて」

男の肩に手を当てて、彼の頬にキスをするふりをした。女に顔を見られたくなかつたので胸に顔を埋めた。

こんな感じでいいのかな？

倅は男の顔をちらりと覗き込む。男は安心した表情を見せ、倅の肩に手をまわす。

「失礼しちゃう！」

その女は頭に血を上らせ、ロビーから消えていった。その姿が見えなくなると男は胸をなでおろし、倅から離れた。

「すまない、助かった。君、名前は？」

よし、完了。

倅は名乗らず鞆を肩に掛け直して、足早に立ち去った。

「あつ、君！」

「今日はRPGはやめて、恋愛ゲームにしよう」と

とにかく倅は早く帰宅してゲームがしたかった。

「峯島君、ちょっと」

翌日、倅は加藤課長から呼び出された。けれどいつもと様子が違い、通路の方から手招きしている。そして誰も使用していない会議室に通された。

中年太りの加藤課長はハンカチで額の汗を拭っていた。倅は課長の仕草を目で追っていた。

「君は社長と面識があるそうだね」

「……へ？ ありませんけど」

「おかしいな。さつき社長からうちの部署に『メガネを掛けて、一つに髪を束ねた女性が働いているだろう』って電話が来たから君だと思ってしまったよ」

「……私しかいないじゃないですか、その格好」

「だろ？ そんな君に、仕事を依頼したいそうだよ」

「仕事、ですか？」

課長は頬に手を当て、倅の耳元で声が漏れないように囁いた。

「社長がもう一度恋人のフリを頼みたい、と」

その言葉で、もやもやしたものがすっきりしてしまった。

昨日の男は社長だったのか！

「お断りします」

踵を返して会議室から立ち去ろうとした瞬間、課長に肩をがっしと掴まれた。

「だめだっ。この話を聞いてしまった以上、君に断る権利は無いんだよ！」

「ど、どういう事ですか？」

「これは極秘なんだ。この件が実行できなかった場合、それに関わった人間はクビになる」

倅は課長の顔をまじまじと見つめた。どうやら課長にふざけている様子はなかった。

「嘘ですよね？ それにこういった内容でしたら、私ではなくても他に適した女性がいますよね」

倅はファッションに無頓着だった。黒髪を一つに結わき、化粧っ気もなければ、安価な眼鏡を掛けていた。

「それが、口の堅さも条件らしくてな……。こんな内容だとは知らず、『彼女はどんな性格だ？』と聞かれたもので、うっかり君の事を先に話してしまったんだよ」

倅の、口の堅さはお墨付きだった。そもそも人の噂話には興味がないからである。但しゲーム関連の情報に関しての口は軽い。

「事情は分からないが、峯島は一度手伝っているんだろう？ 社長

が、出来れば他の人には知られたくないと言っている。俺だって困ってるんだ。峯島く、どうか助けてくれ！クビになったらカミさんにどやされるだけでは済まされないんだよお」

頼むく、と肩を揺すられて課長は懇願した。

課長は四十代後半。お子さんは確か、上から高校生・中学生、下はまだ幼稚園児だと聞いたことがある。課長は必死に倅を引きとめるが、倅には何のメリットもなかった。

「うさん臭すぎます。私は断固お断りします。それでは！」

真顔で敬礼し、課長めがけて手をこめかみから離してその場を後にした。

課長の「みねしまあああ」と悲痛の叫びを背中につけながら。



## 第二話 呼び出し

通常業務に戻り、テンキーで数字を入力していると内線が掛かってきた。

「はい、経理課です」

受話器を肩にはさみ、右手でペンを持とうとした時だった。

「お前は誰だ」

低く、冷たい声で男は言った。倅は開口一番のこの言葉に苛立った。内線でいきなりこんな事を言う人間が社内にはいたとは。言葉の語尾に力が入る。

「失礼ですがどちら様でしょうか？」

「谷川だ。お前の名前は？」

「峯島です」

知らない名前だなと思いつつも、名乗ってくれたのでこちらも返事をした。

「……貴様、「断った」な」

はっとした。

首だけを動かし、課長の席に視線を送る。

左手に受話器、右手にハンカチを握りしめたまま、ぐったりとデスクに横たわっていた。まるで戦いに敗れた戦士の様に。

それを見て血の気が引いた。

ま、まさか。

『今すぐ社長室に来い』

豪快に電話を叩き切る音がした。耳が痛かった。

無視しよう、そう思ったけれど課長の姿を見てしまうと、課長にも更に迷惑が掛かる気がした。

こういう時は直接会って断るべきである。

意を決して立ち上がり、フロアを出た所で倅は立ち止った。

む、社長室になんて行った事が無い。

フロアに戻り、大股でターゲット先へ向かった。

「課長」

「み、峯島」

課長の体がびくと跳ねた。たらりと額から流れる汗をハンカチで拭う。

人に話を聞かれると厄介なので、机の両端に手を置き、課長にずっと近寄った。

課長はハンカチを握りしめ、身構えた。

「社長室はどこですか？」

社長室は最上階だった。

言われたとおりに足を運び、社長室の前に辿り着く。扉をノックし、声をかけると室内から上品な声で応答があり、扉が開かれる。

「経理部の峯島です。社長にお会いしたいのですが」  
「伺っております。どうぞ、お入りください」

扉を開けてくれた女性はとても艶やかで、綺麗な人だった。他にも目の保養になりそうな美女が数名いた。秘書というものは有能かつ顔で選ばれるのだろうか、などと考えた矢先、倅は自分の服装がなんだか恥ずかしくなった。

秘書室を抜けると奥に社長室の扉が見えた。秘書が優雅な動きでその扉を押し開ける。

「どうぞ」

倅は秘書に会釈をして、社長室に足を踏み入れた。

「失礼します」

倅が部屋に入ると、中にいた秘書は全員席を外した。

「お前が峯島か」

低い声が窓際から聞こえてきた。その瞬間部屋の空気が張り詰めた。声だけで威圧感が凄かった。

昨夜の必死な声とは大違いだった。

課長から、社長の簡単なプロフィールを聞いてきた。社長の名前は谷川友樹<sup>ともき</sup>三十七歳。エリート大学卒業後、海外の企業で経営学を学んだ後に、親の経営しているこの会社へ入社。数年で社長に、元社長は会長に就任した。

倅は聞いたことはあったが、興味がなかったので記憶から抹消していた。そもそも経営者に関心がなかった。それを課長に言ったら怒られた。

社長はぎしりと黒い革製の椅子を鳴らして立ち上がり、倅を見た。上から下までじっくりと。

「昨日は助かった。礼を言う」

「いいえ、お礼は結構です。……よく、私だと分かりましたね」

「退社時間から絞り出した」

倅は俯いてぽつりと呟いた。

「職権乱用」

「なんだと？」

「いえ何でもありません」

地獄耳め。

倅は社長を改めて観察する。社長は背が高く、体はがっしりしていた。年齢の割に貫録があった。端正な顔立ちで、はたから見れば格好いい部類だろう。だが倅の好みではなかった。

「呼び出したのは他でもない。恋人のフリを頼みたい」

ほらきた。

倅はさっそく戦闘態勢に入った。

### 第三話 お断りします

「呼び出したのは他でもない。恋人のフリを頼みたい」

「そのお話はお断りしたはずですが」

社長は視線だけで、倅を押し黙らせた。

「峯島、お前は独身だと聞いたが今、彼氏はいるのか？」

いきなりスルーですか。

「いませ……、います！」

危うく正直に言ってしまう所だった。彼氏がいる事にするのが、断るには一番早い方法だった。

「そうか、いないのか。加藤課長の情報通りだな」

課長、私の情報をどこまで流してるのよ……。

がっくりと頂垂れた。

「どうして恋人のフリが必要なんですか？」

「俺は正直結婚に興味が無い。何度もそういつているのに近寄ってくる女性が後を絶たない。女に困っているわけではないし、恋人も今は要らないと思っている」

確かに女には困ってはいなさそうだなと倅も思った。

「なるほど。けれど恋人を演じるのなら、秘書の方でも十分なので

はないでしょうか？」

「なんだと？」

不機嫌な感情をすごく表に出してくる男だった。

「あんなに綺麗な女性が身近にいらつしやるなら、あの方々でも十分役割を果たしてくれるのではないかと思ひまして……」

社長は深い溜め息を吐いた。

「他の奴らに頼まないのは、そのまま本気になられても困るからだ。秘書のやつらなんて、玉の輿を狙って香水をぶんぶんさせてるんだぞ？ あわよくばと考えている奴らにこんなこと頼めるか」  
「もしも私が協力して、本気になったらどうするんですか」

倅の言葉に、社長は鼻で笑った。

「お前は、ゲームにしか興味がないと聞いている」

おつしやる通りでございます。

倅は脱力した。

そんな情報まで流しているのか、課長は……。顔を覆わずにはいられなかった。

「それと経営の事を他人に口外しない、秘密を守るやつでないで困るんだ」

「……ああ、それで口の堅い人を探していたんですね。ではプロの方でも頼んで下さい。では！」

倅には『断る』という選択肢以外は考えられなかった。退出する

ために扉に体を向ける。

しかし社長の足は長かった。倅はあっさり捕まり、体を反転させられた。

「何ですか」

「お前は分かっているようだから教えてやろう。これを見る」

ぱつと目の前にA4の紙を広げて見せる。

それには契約書と書かれていた。つらつらと書かれた文章を、瞳だけを動かして読んでいく。

どこにも、断ったらクビとは書かれていなかった。倅はほつとした。

けれど最後のほうに『完璧に演じることが出来た場合、報酬有。金一封・二百万円也。受け渡し方法…一時金として給与に上乘せ』と書かれていた。

「ほつ、報酬!？」

「これはビジネスだ。悪くない話だろう？ さつさとこの書類にサインをしろ」

お金に目が眩んだ。なんて中途半端な金額なんだと思いつつも心が揺れる。マイホームを手に入れるためにはまだまだお金が必要だった。

ポケットから電卓を取り出し、ガチャガチャ鳴らしながら数字をはじき出す。

「はあー……」

倅は首を横に振った。一時金で受け取ると税金が引かれる事に気



が付いてしまった。そして恋人のフリを完璧にこなす事自体に無理がある。恋愛なんて学生の頃にしたきりだ。

「この話は無かったことにして下さい」

「この額じゃ不満だというのか!？」

両腕を掴み、社長は諦めない。倅は逃れるために必死にもがいた。

「違います! 一瞬目が眩みましたが、私には無理です。美しい、つりあう人を探して下さい……痛っ」

顔に社長の肘があたり、倅の大事な眼鏡が飛んだ。お金を切り詰めて買った安物の眼鏡が。厚みのあるレンズの表面は傷が付きやすかった。

「眼鏡が……」

メガネメガネと絨毯に手を這わせる。あつた。

持ち上げると特段傷も無ければ壊れてもいなさそうだった。ふかふかした絨毯のお蔭だった。立ち上がりながら眼鏡を掛けようとしたところに、社長に眼鏡を奪われた。

「ちょっと、何するんですか」

社長が驚いた様子で倅を見ていた。

「？」

「驚いたな」

髪の毛のゴムをぴんと取られ、毛を手で梳かすように頭を撫でら

れた。

ぞわぞわつとした。

「お前これを見て何とも思わないのか？」

鏡の前に立たされ、倅は目を細めた。

「近眼なので良く見えません」

よくみる！ と顔面を掴まれ、鏡の真ん前に押し出された。

「これが何か？」

普段から見慣れている自分の顔を見ても倅は何とも思わなかった。

はあ、と社長は溜息を漏らす。

「お前に頼みたい。口の堅さも加藤課長のお墨付きだしな」

「いやーです！ 面倒な事に巻き込まれるのは嫌なんです」

「逃げる気か、峯島！」

眼鏡を取り返し、社長室を出て扉を閉めた。

ふう、と息を漏らす。

ふと視線を感じた。秘書の面々が倅を見ていた。

そうか、このだらしない格好のせいか。

眼鏡を掛け、身なりを整えてその場を後にした。

## 第四話 結局手伝う羽目になる

「頼み事をしたいなら、そちらから来て頼むのが筋じゃないでしょうか」

社長は諦めが悪かった。

あれからもしつこく内線で依頼され、倅は困った拳句に吐いた言葉だった。平社員が社長にそこまで言ったら、怒ってもう頼みに来ないだろうとたかをくくっていた。

けど、来ちゃったよこの人……。

仕事を終わらせて下に降りると、社長はロビーで倅を待ち伏せしていた。その姿を見て倅は目を覆う。課長が倅の退社時間を報告したのだろう。

社長は人気ひんげのない方へと倅を引っ張り、腰に手を当て、胸を張った。

「来てやったぞ」

「ごめんなさい。許して下さい」

倅は静かに頭を下げた。ちろりと社長の顔を見る。

「俺が直接来て頼んでいるんだ。約束だ。一度やってってくれるんだからいいじゃないか。一度や二度も同じだろう。頼む」

「勘弁してえ！」

手首をがっしりと掴まれ、振りほどくことができなかった。倅は腰を下げて必死に抵抗した。

「その後はもう近づかない。約束する。な？」

社長は倅の顔を覗き込んだ。諦めの悪さに倅はとうとう観念した。

「……じゃあ、一度だけですよ？」

「へえ」

その声の方向を見ると以前ここで出くわした女性が腕を組んで立っていた。呆れ顔で倅の体を眺めていた。

イライラが絶好調なのだろう。顎と指先がリズムを取っていた。

「彼の方が彼女にぞっこんなのね。そんなにいいわけ？ その女の体が」

「「えっ？」」

倅と社長は硬直した。

「あんだ、見た目はダサイクセに体で横取りしたのね。見てなさい  
「よ」

ふんと女性は力任せに地を蹴って消えていった。

「な、何か勘違いしてませんでしたか？」

「だな」

だな、じゃないわよ。

倅は社長を睨みつけた。

「この際、フリなんかじゃなくて、きちんと相手の方に断つたらどうですか？」

「何べんもその気はないと言っている。見ていてわからなかったか？ あいつらは俺の話を聞こうとしない。だからこの作戦を思いついたんだ。あいつらと違うタイプの女性と付き合えば諦めてくれるだろうと思っつてな」

「まあ、たしかにタイプは違いますよね」

倅は私服を見渡した。ラフなシャツにジーンズ姿だった。

「なるべく迷惑は掛けないように守ってやるから安心しろ。それとできれば髪の毛と眼鏡、何とかしておいてくれ。それと服装はオフイス系で頼む」

あなたはーコですか。ピーーのファッションチェックですか？

心がぐっさりと言つき、倅は貧血を起こしかけた。

嫌々ながらも髪の毛は束ねず、家にあつた使い捨てコンタクトを付ける。

倅は自覚はしていたが、同性からはつきりと『ダサイ』と言われ、少なからずシヨックではあつた。更に社長からの駄目出しで傷口に塩を塗られた気分だった。

ラフな格好はやめて、スーツを着崩した感じで出社した。こつち系はてんで弱かった。

社内ではイメチェンですか？と聞かれまくったので気分転換だごまかした。

倅は内線が鳴る度にワンコールで出る勇気が無くなっていた。電話から視線を外しつつも三回目で渋々取る。

「倅か？ 今すぐ来い」

案の定、社長からだった。

いきなり呼び捨てで呼び出しですか……。

机に手を掛けて、重たい腰を上げた。

昨日の今日だから契約でもさせられるのだろうか、とぼとぼと社長室に向かった。秘書に通してもらって部屋の扉を開けてもらうと、高齢の男女が立っていた。二人は倅をまじまじと見ていた。恐る恐る部屋に入る。男性は明らかに会長だった。社内報やパンフレットでよく見かける顔だった。

「失礼しま……す」

「倅、おいで」

社長が弾ける笑顔を見せ、手を伸ばしてきた。ぞくりとした。この男も笑うのかと驚きつつも状況が全くつかめない。

どうしていいのかわからず、とりあえず社長の傍に寄ると腕を引っ張られた。

「紹介するよ、こちらが交際相手の峯島倅さん。こっちは俺の両親だ」

ええ！？ いきなりフリ開始ですか！？

うっかり条件反射で対応する。

「初めまして、峯島倅と申します。よろしく願いします」

腕を振りほどいて会釈した。が、すぐに手を取られ、握られる。

その手は社長の背中に引き寄せられたので、肩がこつんと社長に触れた。握られ慣れてないから手がむずむずした。

「本当に付き合ってるのか？」

突然社長の指が手のひらをくすぐり、倅の指を優しく絡め取る。ぞくつとして、倅は思わず顔が熱くなり俯いてしまった。

「その反応からして、本当のようね。疑って悪かったわ」

「だからそう言ってるだろ」

両親は渋々納得した様子だった。

「わかった。あちらの令嬢にはこちらから断りの連絡を入れておくから」

「そうしてくれると助かる」

社長の両親が部屋を出る間に、社長が倅の耳元に息を吹きかけた。倅はぞわつとして軽く悲鳴を上げた。

倅は小声で「止めてっば」と社長を肩で小突いた。

その声を聞いた両親は、見ていられないといった様子で肩をすくめ、立ち去った。

扉が閉じられたと同時に、社長は手を離れた。ふっと笑って机に体重を掛ける。倅は耳を手で覆った。

「上々だな」

「いきなりフリで呼び出すなんて……」

社長はストーカー女だけでなく、両親から持ち込まれる見合い話も一掃させるために倅を利用しようとしていた。

「もちろんそれなりの報酬は渡すと言っただろ。周りが落ち着いたら、別れたと伝えるから安心しろ」

社長が倅に近づき、真顔で鼻先に指を当てた。

「だがなフリといっても、全力で演じる？　これはビジネスだ。絶対に嘘だと悟られるな。分かったな」

「はあい」

背中を仰け反らせて倅は返事をした。社長は頬を掴んだ。

「なんだその嫌そうな顔は」

「いへ。べちゆに」

「報酬で好きなだけゲームでも買え」

その言葉を聞いた倅が、間を置いた後、徐々になやけだす。

「お前、本当にゲームが好きなんだな。報告書通りだな。頑張りようによっては、グッズとか手に入れて来てやるつか？」

「えっ」

倅は目を輝かせた。



「分かり易いなお前。知り合いがいるからツテでもらってきてやる。早速だが契約書にサインしろ」

書面で逃げられない様にする手段はさすがだなと倅は感心した。倅はソファーに腰掛けて、契約書にサインをした。

「そつえば課長は私の事、どういう風に報告を上げてるのでしょ  
うか」

社長は机に向き直り、書類を見直す。

「峯島倅三十二歳。一人暮らし。彼氏無し。彼氏がいたかどうか不明。それくらい付き合い無し。趣味はゲーム。ゲームに関しての会話は熱い。ゲームソフト発売日に残業を頼むのは難しい。恋愛に興味が無い。着飾る金があるならゲームを買う。干物女。欲しいものはお金。そのお金の使い道はゲームを大音量で楽しむ為のマイホーム資金。ローンは組まずに一括購入希望。現在マンションが一戸建てのどちらにするか迷っている様子」

「はっ……………」

課長の洞察力に驚愕した。言葉が何も出なかった。

「まずは少し自分磨きをしろ。職場でもその格好でいろよ。今日みたいにいっ呼び出すか分からないからな」

倅の不得意分野だった。というより、マイホームの為の貯金に手を出したくなかったというのが本音でもあった。同じ使うならゲームを買った方がまだ良かった。

「何黙ってるんだよ」

社長は空気を読み、財布から何かを取り出して倅の胸元にそれを押し付けた。

「金か？ だったらこれを使え。俺はもう行かないといけないから、じゃあな」

それを手で受け取るとそれはゴールドのクレジットカードだった。倅ははっとした。

「ま、待ってください社長！」

倅が腕を伸ばして引きとめるのを無視し、社長は鞆を掴んで颯爽と立ち去った。倅はその場に崩れ落ち、両手に納めたゴールドカードを見つめ、呟いた。

「待ってって言ったのに。クレジットカード、名義人しか使えないんですけど……」

## 第五話 打ち合わせ

「峯島か、定時後に夕食を取りながら打ち合わせを行う。帰るなよ？」

有無を言わずに電話を切られ、倅は後悔する。やはり請け負わなければ良かったと。

「はあ、ゲームが出来ない」

がつくりと肩を落としながら、待ち合わせ場所に向かう。会社の外にタクシーが横付けされていた。社長が呼んだタクシーなのだろうか。少し離れたところで立っていると、後から来た社長に背中を押され、乗れと促された。

そのタクシーに乗り込み、着いた先はフランス料理の店だった。倅は青ざめる。

「こんな高そうなところで食事だなんて」  
「奢ってやる。安心しろ」

その言葉を聞き、倅の足は動き出した。

案内された席に対面で腰掛ける。テーブルには白いクロスが掛けられ、その中央に置かれた一輪挿しに生花が飾られていた。

メニューを見てもピンと来なかったので、社長に任せた。社長はメニューも見ずに何かのコースを二人分頼んでいた。

「まずはこちらをお返しします」

倅は理由を述べてクレジットカードを返した。

「そうか、では費用が発生した時は領収書を俺によこせ。その分は全額現金で払ってやる」

「わかりました」

社長はワインを味わいながら、倅の服装をチェックした。

倅は無難にパンツスーツにブラウスを着用していた。視線だけでチェックされているのは倅にも理解できた。

「できればスカートを履いてくれ」

「ええー。社長って女性の足が好きなんですか。うわっ、飛ばさないで」

倅の一言で、社長は飲もうとしていたワインを口から吹きこぼした。

「好みなんていいだろ別に。お前はスカートのほうが似合うと思うからだ！」

「そーでしたか」

社長は倅に言い当てられ、動揺した。そうだと素直に言えなかったのは、やや批判気味に言われたせいもあった。

気を取り直して社長は本題に入る。

「早速だがフリをするために、余所余所しさをなくしてもらおう。その為に二人でいるときは名前で呼べ。分かったな？」

「……はい、谷川さん」

「苗字じゃない、名前だ！」  
「はひっ」

倅は背筋が伸びた。二人きりでもこの威圧感を何とかしてもらいたかった。

「それと、携帯電話の番号を教えろ。連絡先が内線だけだと不便だ」  
「はい。じゃあ番号を言いますね。090」

倅は暗記している自分の番号を言い出した。

「ちよつと待て、赤外線通信があるだろ」  
「……赤外線？」

倅はきよとんとしていた。

「赤外線、分からないのか？ お前のほうが携帯を使いこなしているのにな……。携帯を貸してみろ」

倅が鞆から携帯電話を取り出すと、それを社長は掴み取る。二つ折りの携帯を開き、待ち受け画面を見て固まった。

「な、んだ？ これは何の絵だ？」

「ああ、それは今私がやっているゲームの待ち受け画像ですよ」  
チカチカしたイラストを見て、社長は『引いて』しまった。

これが倅の好きなゲームなのか。何のゲームなのか想像すらできなかつた。

軽く頭を振ってから、社長は慣れた手つきで赤外線通信の画面を表示させ、アドレス交換を完了させた。

倅は携帯電話を受け取り、鞆に収めた。

「そういえば、あんなに綺麗な女性と、どこで知り合っんですか？」  
「彼女たちは取引先や別会社の社長令嬢が殆どだ。両親が勝手に仕組んだ見合い話の原因だ」  
「そうだったんですね」

確かに見た目も良くて、肩書が社長だったら伴侶としては申し分無い相手なのだろう。だけどこんなにもピリピリした男のどこが良いのだろうか。

倅は眉根を寄せて社長を見ていた。

「ところであの女性はいつ出沒するんですか？」  
「あいつらは神出鬼没だ。自宅や会社の前で待っていたりする。最近は引越したから自宅に来ることは無くなったが。何度か婚約者ヅラをして、社長室までのこのこ足を運んできた時は本当に参った。今は警備員と秘書に事情を話してあるから、社長室までは来なくなつたがな」

警備員は十九時で上がってしまう。だからその時間あたりから口ビーをうるついていたのか。

「そこで、倅には一緒に帰宅したり、こうして何度か食事を付き合ってもらいたい」

「食事ですか」

「次回からは別会社の社長たちが接待でよく使う店に通う。直接会って断っているにも関わらず、娘共々諦めない人間が数名いるんだ。そんな彼らに俺の恋人の存在を見せつけければ諦めもつくのだ」

「なるほど……」

「だから親しげな雰囲気作りに気を配れよ!？」

「はい」

できるだけ短期間でこの茶番劇を終わらせたかった。ああもしよつちゅう金切り声で結婚を迫られては、疲れが増すばかり。これでもようやく邪魔な存在が排除できる。

倅という好都合な女性が見つかり社長は安堵していた。突然呼び出してもすぐに合流できるし、同じ会社というだけで交際理由にもなる。

社長は煽るようにワインを飲み干した。

倅は目の前に運ばれた料理を見つめ、一口食べた。それからその味を確かめるように何度も食べて味わっていた。

いつもこんなにも美味しいものを社長は食べているなんて。エンゲル係数、高すぎ。ああ、だけど本当に美味しい。幸せすぎる。つい倅の顔は緩む。

今日の打ち合わせ内容によっては、この仕事を断ろうかと倅は思い悩んでいた。食事をすすめながら倅は再び考える。

毎回ご馳走してもらえるととなると、その日の夕食代が浮く。いいかもしれない。

すぐに頭を振った。夕食代といっても自炊している為、浮いてもせいぜい一食数百円程度だった。あまり意味がないではないか。更に倅は右手のナイフを皿に戻し、額に手を当てた。

肝心な事を忘れていた。ゲームをプレイする時間を削られることのほうが何よりも大きい事に。

今度は大事なことを思い出し、倅は顔を上げる。報酬の事を失念していた。報酬がもらえたら諦めていたゲームが入手できるではな

いか。右手の指を折りはじめる。購入を断念したものや、発売予定で諦めていたゲームソフトを思い返す。

やはり新しいゲームをプレイしたい。現在よりも未来。未来を見つめねば！

右手に拳を作り、決心した。倅は仕事を断ることをやめた。

倅の表情がくるくると変わる。

「どうした、まずいのか？」

「いいえ、とつても美味しいんです！」

倅の笑顔を見て、社長はほっとして食事を始めた。

倅がどうして恋に走らず、ゲームばかりに夢中な人生を歩んでいるのか気になった。

「そつえば、お前の好きな男性はどんなタイプなんだ？」

「私ですか？」

恥らいながら倅は答えた。

「色々ですけど。好きなタイプはゲームキャラですね」

「ゲームキャラ？」

「仕草やセリフとか、色気のあるキャラなんて最高ですね！ そんなキャラに出会ってしまったら悶え死にます。他にはちょっと抜けてるキャラとか、母性本能をくすぐる弟系キャラとか！ くうー！ 言葉だけでは伝えきれない！」

目をキラキラと輝かせ、倅が不思議なハイテンションでゲームキャラについて熱く語りだした。饒舌スイッチが入った倅の口は止まらなかった。



倅に圧倒された社長は、ただその姿を呆然と眺めていた。

倅は好きな話を満足するまで喋りきり、清々しい顔をしていた。

コースも終了し、全て食べ終えたところでお開きとなった。

中盤は打ち合わせというより、倅の熱弁大会に近かった。その後は、たわいもないプライベートな話の情報交換の場となった。

頼んだタクシーが二台到着する頃、社長はレストランの会計を済ませる。倅は店を出たところで社長に向き直る。

「今日はご馳走さまでした」

「ほら、タクシー代だ」

財布から出されたお札を、倅は受け取らずに拒否した。どうして躊躇いなくそれをぼんぼん出せるのだろうか。

「いいですよ。お金がもつたいないです」

「何を言ってるんだ、タクシー代くらい出してやる。俺が呼び出したんだから気にするな」

「だけど、このお金があったら……、ゲームが一つ買えちゃいます。それでは、お休みなさい」

「ちよつと待て！」

歩いて帰ろうとした倅を引きとめた。歩いて帰るにもここから駅まで三十分近く掛かる。バスを待つとしてもこの時間では本数が殆どない。

「今日の所はタクシーで帰れ。金も気にするな。社長命令だ」

「わ、分かりましたあ」

倅がタクシーに乗り込むまで、社長は睨み付けていた。  
今まで付き合ってきた女性は奢られるのは当然といった女ばかり  
だったので、拍子抜けしていた。

「変な奴」

社長もタクシーに乗り込み、帰宅した。

第五話 打ち合わせ（後書き）

恋愛までなかなか辿り着けない><

## 第六話 お誘い

ある日の夕方、課長が倅を手招きした。

「峯島君、ちょっと」

課長が『君』付で呼ぶ時は、大体ろくなことがない。

倅は机に手を掛け、重たい体を起こして課長の席へと進んだ。

「何でしょうか」

課長は立ち上がり、咳払いを一つした。

「峯島、今日はゲームの発売日か？」

「いいえ？」

「では、残業を頼まれてくれないか？」

「残業、ですか？」

倅の顔には明らかに「残業よりもゲームがしたい」と書かれていた。課長は一瞬たじろぐものの、気を取り直して頷いた。

「うむ。今日は二人インフルエンザで休んでいるだろ。それでだな、峯島には悪いんだが残業を頼みたくな。分かっていると思うが明日中に仕上げないと間に合わない仕事が残ってしまってるんだよ。残業して少しは稼ぎたいって言ってたじゃないか。もちろん他の皆にも手伝ってもらおうから」

「……わかりました」

課長はほっとしてどさりと椅子に身を預け、額から流れる汗を八

ンカチで一拭きした。

倅は集中力を最大限に活かし、仕事の追い込みに入る。皆で少しだけ残業すれば二人分の仕事なら簡単に補える。

集中力を保たせたいのに、内線電話が鳴った。倅は画面から目を離さずに受話器を掴んだ。

「はい、経理課です」

『峯島か？』

この低く苛ついた声の主が、誰だかすぐに理解して眉間を押さえた。

「なんです、こんな時間に」

『携帯に出ないからだろうが』

一番下の引き出しを開けて鞆を見ると、携帯電話が着信を知らせる点滅を続けていた。引き出しを静かに閉め、課長の席に視線を向ける。

課長はハンカチを握りしめた手を小刻みに震わせながら倅の方を見ていた。課長は意を決して立ち上がるうとしていた。

「残業中に取りれますか！」

『まだ終わらないのか？』

時計を見るとまだ十九時だった。残る仕事は最終チェックを済ませればほぼ終わりだった。

課長は立ち上がり「あらかた片付いたなら無理せず帰っていいぞ。

お疲れ様」と声を掛け始めていた。  
その声で、静寂な職場が賑やかになる。

「えーと……」  
『飯、食べに行くぞ。帰る準備して地下の駐車場に來い。分かったな』

電話を叩き切られて、受話器を思わず耳から離した。全く乱暴な  
んだから。

帰り支度をしているところに、同僚の黒井晃くろいから声を掛けられる。

「峯島さん、これネットで見つけた面白そうなゲームのリスト」  
「いつもありがとね」

黒井はゲーム仲間の一人だった。  
倅の家にはパソコンが無い為、黒井からネットで情報や攻略方法  
をプリントしてもらっていた。

「それとき、あいつんちの奥さん、木綿子ゆづこさんが今夜夕飯ごちそう  
してくれるって。その後みんなでPSPやるんだけど、峯島さんも  
来るよね？」

木綿子さんは元同僚だった。社内恋愛の末、寿退職をした。倅の  
ゲーム仲間の一人でもあった。

黒井が指差した方向に木綿子さんの旦那が立っていた。  
倅の顔が一瞬綻んだが、ぐっと堪えた。

「ごめんね、今日は予定があるから行けないや。今度また誘ってね

「！」

悔しそうな顔をして倅は鞆を持って退社した。

黒井はそれを他の二人に報告した。

「えっ、珍しい。誘うと必ず来るのに」

「最近さ、峯島さんってオシヤレに目覚めた感じするよな。それってやっぱり男でも出来たんじゃないのか？」

「ゲームにしか興味が無い感じだったのに？」

二人は倅の話題で盛り上がる。

顎に人差し指を曲げて添え、一人が口を開いた。

「いや、違うな。あれは好きな男が出来たんじゃないか？」

「えー、相手は誰だよ」

「俺は彼女が居るだろ、お前は妻帯者だし。消去法で行くと、黒井あたりか？」

「えっ、俺！？」

黒井は鳩に豆鉄砲を食らった顔をしていた。

もう一人の同僚も衝撃を受けていた。

「まつさかー。……でも、ありえるな。ゲームでも意気投合できる  
独身男性といたら黒井ぐらいだよ」

二人は頷いていた。

はじめはありえないと否定していた黒井は、その言葉に半信半疑  
になってしまった。心当たりがあるといえばある。ゲーム繋がりと

はいえ、倅と一番会話をしているのは黒井だった。

さっき悔しそうな顔をしていたのは、俺とゲームができないからだったのか……？

まさか、な。

黒井は頭を掻きながら呟いていた。



## 第七話 安いおねだり（前書き）

七話目から三人称の「社長」を「友樹」に変えました。

## 第七話 安いおねだり

「お待たせ、友樹」

友樹は車の中で倅を待っていた。倅は、社長と会ったらすぐに名前を付け加えて呼ぶ訓練をさせられていた。

あれからも何度か外食を共にして、互いに打ち解けつつあった。

「倅、ちゃんとスカートを履いているんだな」

「そーですよ。後でレシート渡しますからねっ」

膝の上に鞆を乗せ、倅はスカートの裾を引っ張った。足元を見られたのだと思うとなんだか気になってしまった。

またしても高級な店に到着し、車庫入れしている車の中で倅は咳いた。

「今度からはもう少し安いお店にしませんか？」

「それでは意味がないって言ってるだろ」

「でも、やっぱりお金がもったいないです」

「気にするな。美味しいものが食べられて、あの女たちが近寄らなくなるのなら安いものだ」

倅は唇を尖らせたまま友樹の顔を見ていた。友樹は倅の頭を撫でた。

どうにか倅を納得させた友樹は、暖簾を持ち上げて先に倅を店内に入れさせた。

「あの、この手」

「なんだよ」

フリを実行しているせいなのか、友樹の手は倅の肩から離れなかった。

倅には不快でしかなかった。

「調子に乗りすぎですよ。お触り厳禁！」

肩を捻り、その手から逃れた。友樹の舌打ちが聞こえたが、倅は聞かなかった事にした。

席につき、食事を始めると倅が真剣な表情で問いかけた。

「友樹って、お腹が空くとイライラするタイプ？」

「……は？」

「だって、誘うときはいつも不機嫌なのに、食事を始めるとそうでもない感じがして」

そんな風に見られていたのか。友樹は箸を置いた。不機嫌になる原因は自分自身が良くわかっていた。

「仕事で疲れているからだ」

「じゃあ、仕事の事は忘れましょうよ」

友樹は一瞬固まり、そして倅を見た。

「せっかく美味しい料理を食べてるんだから。今を楽しみましょう？」

高級なお店は気が引けると言っていたのはどこへやら。倅はもぐもぐと頬を動かしながら、満足げに平らげていく。

友樹は俯き、拳を口元に当てて必死に笑いを堪えた。聞かなくて

もわかっていてるのについ声を掛けてしまった。

「美味しいか？」

「美味しいです！」

倅は気に入ったものに対してはすぐに表情に出る。

「それ肉か魚か、わかるか？」

「わ、わからないです。肉？」

「それは豆腐だな」

「ひどい！ その選択肢だどっちかだと思っじゃないですか」

友樹は嘔き出した。

倅はお腹がはちきれそうほど食べた。

「一週間分くらい食べた気分。ご馳走さまでした」

「またこういう店に来ることがあるが、金の事は気にしないでいいから。倅と一緒にだとなんにお金はかからないし」

「わかりました」

ほら、と友樹に手を差しのべられた。が。倅はその腕をおろさせた。

「そういう事はフリでも駄目です。だから相手が勘違いするんじゃないですか？」

お堅い倅に不満を抱きつつも、友樹はフリを全うしようとしてい

る倅の姿に感心していた。

仕方なくフリの為のスキンシップを友樹は諦める事にした。倅に対してスキンシップをはかっても本気にならないと安心しての行動でもあった。

友樹と倅は店を出た後、肩を並べて歩きはじめる。

「駐車場が少し遠かったな」

「食後の運動にはちょうどいいですよ」

倅たちは近くのコインパーキングまで歩いていった。

倅が一度タクシーを断ってから、友樹は食事中にアルコールを飲まなくなった。帰りに倅を送って帰るのが習慣になっていた。

「だけど、外食ばかりだと太りませんか？」

「そうかもな。だが帰ってもご飯がないから仕方がない」

「友樹って一人暮らしなの？」

「倅もだろ」

互いのプライベートも少しずつではあるが、分かってきていた。互いに会話も大分慣れてきて、友樹はこれなら『彼女』が通用するかもしれないと安心していた。

「友樹が料理する所が想像できない」

「失礼だな。時間があれば作るぞ。最近は疲れてそんな気になれないだけで」

「そうなんですかー」

倅が突然立ち止まり、一点を見つめていた。

「友樹！」

がしつと掴まれ、友樹はつんのめりそうになる。

「何だ」

倅はキラキラと目を輝かせ、友樹の顔を見ていた。

ま、眩しい。

目を細めずにはいられなかった。そして胸がどくと反応した。

「お願いがあるんです！」

腕を掴み、もう片方の手は後方を指差していた。

その方向を見ると、UFOキャッチャーが所狭しと置かれていた。

「あれ、欲しいです！」

初めて友樹に向けて見せた笑顔。それはぬいぐるみ欲しさに出た表情だった。複雑な心中を悟られぬように倅の手を払い、スーツを正した。

「……どれだ」

ぐんつと腕を引かれ、一台のUFOキャッチャーの前に立たされる。倅はおでこをつけて、人差し指が、ぐにんとまがるほどに押し当てた。

「あれ、あのぬいぐるみです」

猫？　なのか、これは。

友樹にはコレの良さが理解できなかった。けれど倅から「取って、

取って、絶対取って。これ欲しい」とさすがのような目で見られ、お願いを叶えてやりたくなかった。

取れるかどうかは不安だった。だが、倅の為に取らなくてはいけない気がした。

財布を取り出し、小銭を出そうと思ったら万券しかなかった。

両替機を探すために店内を見渡そうとしたところで、倅に袖を掴まれた。

「これっ、これで取って？」

「……用意周到だな」

倅から五百円玉を数枚渡された。倅はゲーム関連のグッズにもお金を惜しまなかった。本来は五百円貯金の為に取っておいたものだった。

友樹は手のひらを見つめ、眉根を寄せた。

この枚数、これは明らかに失敗を想定されている。めらめらと闘志が湧き上がる。

絶対に一回で取ってやる。

友樹はコインを投入した。

「なかなかストレスを感じる代物だな」

友樹は首を左右に動かさし、肩を揉んでいた。

倅はぬいぐるみを持ち上げては、何度もそれを見つめていた。倅のこんなに綻んだ顔を見るのは初めてだった。

「ありがとう」

友樹は初めて倅から心からお礼を言われ、心拍数が上がるのを感じた。

「お前のおねだりは、安上がりだな」

「何言ってるんですか、三千元も使っておいて」

今度は心臓がずきんと痛くなった。仕方あるまい、ゲーム全般は苦手なのだ。だが、やり始めてみると単純のようで頭を使う所が奥深かった。倅はアームが弱いと嘆いていたが、その意味が今一つわからなかった。普通に狙っては取れない為、ぬいぐるみのずらし戦法やらを色々試して、どうにか取ることができた。たった一つだけ。倅は三千元と言いつつも、とても嬉しそうだった。

車の中でもそれを、子供のように抱きしめていた。人に喜ばれるのがこんなにも嬉しいものだったとは。

友樹は倅の顔を盗み見ては微笑んでいた。



## 第七話 安いおねだり（後書き）

お気に入り登録がどばっと増えて、びっくりしています。

緊張のあまり文面に影響が出てしまった所がちらほらあるので  
いずれは直したい…と思っています。

（文才がないのでとりあえずこのまま突っ走ります）

お気に入り登録と評価、そしてお読み頂き有難うございます。  
励みに頑張ります><

## 第八話 喜ぶ顔が見たかった

仕事の合間に、友樹は友人の勤める会社に立ち寄った。

「こんなに貰えるとは思わなかったな」

友樹は受け取った段ボールの蓋を開けて中身を覗いていた。前にUFOキャッチャーで取ったぬいぐるみその他にも見た事の無い種類のものが入っているが、これも割と人気があると友人が言っていた。

サンプル品が多く、少しいびつなものも混ざっているが、これだけあれば気に入ったものがいくつもあるだろう。これらはタダなので、倅なら遠慮せずに絶対に受け取るはずだと確信する。

友樹はいてもたってもいられなくなる。

友樹は会社に戻り、倅を夕飯に誘う事にした。

どんな顔をして喜ぶのだろうか。

定時前に携帯電話へ電話を掛けるが、仕事中的よう電話に出なかった。分かっていた事なので着信と留守電を残す。

倅は携帯電話に着信があっても、定時後だろうが休憩中だろうが仕事中は掛け直さない女だった。

よって、いつものように定時を過ぎたあたりで倅の課長に内線を掛け、倅の残業時間を確認してからそちらに掛け直す。

直接倅の内線に電話を掛けないのは、他の社員に電話を取られると色々面倒だからだ。

三コール目で繋がった受話器から倅の声がした。浮かれた気持ち

を声で悟られないようにと、ぶつきらぼくに倅の名前を呼んでしまった。そのせいで倅から露骨に嫌な声で対応された。つい条件反射でいつもの如く命令口調で呼び出した。

倅の不満げな様子に少しだけ腹が立った。だが、絶対にこれを見たら喜ぶはずだと友樹は確信していた。

すぐに見せては楽しみが減ってしまう。

食事が終わり、助手席に乗り込んだ倅に声を掛ける。

「倅、後ろにある段ボールの中身を見てみる」

倅は訝しげな顔で友樹の顔を見た後、身を乗り出して後部座席の段ボールの蓋を軽く開けた。

「あつ」

倅は中身を数個持ち上げて、助手席に座り直した。

「それ、友人からもらってきた。倅にやる」

倅はニヤけては、きりりと表情を戻すを繰り返す。ごほん咳払いをして友樹の顔を見た。

「有難うございますっ」

「約束だったからな」

弾む声、それだけで友樹も嬉しくなる。

視線は合わなかったけれど、倅が手に持ったものを見つめている姿を見られただけでも満足していた。

「それ、運んでやるよ。家はどこだ」

「結構です。うちの近くの道路は一方通行が多いから。あ、ここで大丈夫です。止めて！」

毎度の事ながら、倅は家の前まで送らせようとしない。言われた通り、ハザードを点けて停車する。

車から降りて、倅は後部座席から段ボールを持ち上げた。それを横から取り上げると、倅は複雑な表情を見せた。友樹は運ぶ気だった。上がるつもりは無かったが、どうしても届けてやりたかった。

「うちのアパート、古いんで。見られると恥ずかしいからついてこなくていいですから！」

手のひらを見せて思い切り拒絶され、気持ちが沈む。どうしてもそこまで拒むんだ。

倅は友樹の腕の中の段ボールをそつと取り上げた。

「友樹、これ、本当に有難うございました」

ああ、またこの笑顔。自分に向けられた笑顔が心地よかった。表情を見られないように口元を覆った。

頭を深くと下げた倅は、段ボールを大事そうに抱きかかえて自宅へと帰っていく。

倅が視界から消えるまで、友樹は後姿を見届けた。姿が見えなくなるまでと寂しさを覚えた。

「……はあ」

サンプルじゃなくて、きちんとしたものを買ってやればよかった。

ハンドルにもたれて、友樹は独りごちる。

喜んで貰えたものの、友樹の心の中は自己嫌悪で一杯だった。

## 第九話 訪問者

週末、倅は朝食もそこに朝からゲームをしていた。友樹との付き合いのせいで、ゲームをする時間が激減していた。集中してゲームを進めていく。

チャイムが一度鳴った。

休日のチャイムは勧誘が多い。知り合いなら事前に電話が来る。それが分かっていたので、倅は無視した。

至福のひとときを邪魔しないで。

しばらくしてまたチャイムが鳴る。だんだん感覚が短くなり、最後には連打される。

「ああつ、ムービーの最中は一時停止がきかないのに！」

仕方なくテレビのボリュームを下げて、玄関の前に立つ。

「どちらさま？」

「俺だ」

「俺様ですか。間に合ってます」

何しにきたんだ……。

倅はその声で友樹だと気が付き、踵を返してテレビの前に向かう。どうせまた職権乱用でここの住所も調べたに違いない。

扉を一度叩かれた。

「社長が直々に来てやっているのに、その態度は無いだろっ」

「約束も無しに勝手に来たのはそちらです。立て込んでます。次回はアポを取ってからでお願いしまーす」

倅は定位置に座り、コントローラーを握る。

「アポを取る気もないくせに、何を言っているんだ。開ける、倅！」「声、大きすぎ……」

倅は頭に痛みを覚えた。

「お前は態度がでかすぎだ」

拉致があかないと、倅は諦めてしぶしぶ玄関のドアを開けた。

「休日は何の用ですか。……ぶっ」

少しだけ開いた扉を、友樹は強引に手前に引いた。ノブに手を掛けていた倅はその勢いで友樹の胸の中に顔面からダイブした。

「あー、眼鏡に顔の脂があ。あっ、ちょっと勝手に入らないで！」

友樹は気にせず玄関に一步踏み込む。

簡素な玄関から奥の部屋に視線を送る。友樹は見たくて仕方なかった。倅がどんな部屋で過ごしているのかを。靴を脱いで上り込む。

「上がるぞ」

「上がらないで！」

その言葉に友樹は振り返る。

「どうして上がったらダメなんだよ」

「社長の高価な靴下が汚れちゃう」

「は？ お前の家はそんなに汚いのか？」

倅はもじもじしていた。

友樹の私服姿を初めて見た。仕事では髪を後ろに流すようにワックスが付けられているのに、今日は何もつけていない。それだけでもきちんと見える。私服は黒を基調としていた。ジャケットを羽織り、第二ボタンまで外されたシャツに細身のパンツ、革靴を着用している。胸元から色気が見え隠れしているのが、少々目の毒であった。

どれもウン万円しそうな質感だった。それに比べて倅は上下セツトで二千円もしないトレーナー姿だった。

どう見ても倅の部屋には場違いだった。

「掃除はしてますけど……。なんというか、社長の格好は部屋に不釣り合いといえますか。狭いアパートに上がらせるのは申し訳ないというか……。そんな事よりも。どうしてうちに来たんですか！だからダメですってば」

「二人でいるときは名前で呼べって言っただろ！」

珍しく倅がどもる。友樹は気にせず部屋に上がった。

六畳一間の倅の部屋に足を運び、友樹は立ち尽くした。

「……言葉が出ない」

狭い・圧迫感がある・荷物が多すぎ。

縦にベッドが置かれ、ベッドを背もたれにしているようで床にはクッション、その前に小さなテーブル。壁際にラック、テレビ、タンスが置かれていた。テレビの前にはゲームソフトが積み重ねられ



ている。

部屋の隙間を無駄なく使われている感じがした。

テレビ台の中にゲーム機が山積みには押し込まれていた。そしてゲームソフトがラックにびっしりと飾られている。その量がとてつもなかった。

「これを何というのか……。お前はゲームショップでも経営する気か？ 女らしさが殆どないな。いや、あるか。ここに」

積み重ねられたゲームソフトの上に、友樹があげたぬいぐるみが飾られていた。ベッドには元から飾られていたであろうぬいぐるみの端に、UFOキヤッチャーで取った例の猫らしきぬいぐるみもちょよこんと添えられていた。

グッズはぬいぐるみ系で正解だった。嬉しさのあまり顔が緩みかけたが、倅に悟られぬ様にぐっと堪えた。

視線を逸らすと、テーブルの上に無造作にプリントが一枚置かれていた。それを手に取り、目を通す。書類を見つけるとつい見てしまうのは職業病の一つだろうか。それを見た友樹は目が丸くなった。

「なっ……。俺の子 を産んでく、れ！？ なんだこれは。18禁のゲームなのか？ 倅、お前こんなゲームまで……」

友樹の手の中にあるプリントを見て、倅は青ざめた。

あれは黒井からもらった大事な発売日未定ソフト一覧表！

黒井がウケ狙いで見つけてくれていたものを、友樹が読み上げていた。

「わあっ！　ち、違いますっ！　いちいち分析しないでいいですから！　というより何か用事があって来たんですね？」  
「……………ああ」

放心していた友樹から倅はプリントを奪い返した。ゲームをしな  
い人間に見られるのは不思議と気恥ずかしさを覚える。その紙を夕  
ンスにしまいこんだ。

「買い物に付き合え」

「買い物？　そんなの一人で行って下さいよ。私はゲームがしたい  
です。ただでさえゲームをする時間が削られているんですから」

そして倅のプレイ中のテレビ画面を二人は見つめた。

「倅、お前の家のテレビは小さいな」

「え、これ普通だと思いますけど」

ゲームの為にどうしても妥協できなかった二十九インチの液晶テ  
レビを小さいと友樹は言つてのけた。倅は驚きを隠せなかった。一  
人暮らしでは十分な大きさではないのだろうか。

「友樹のテレビは何インチなんですか？」

「わからない。だけどこれの二倍以上はあると思うが」

「……………」

倅は開いた口がぶるぶると震えていた。友樹には倅の頭の中が手  
に取るように分かるようになっていた。

「なんだ？　うちのテレビでゲームしてみるか？」

「いつ、いいんですか！？　……………あ、やっぱり結構です」

ゲームをする時、アパートの壁が薄いために休日の昼間以外はヘッドホンをつけてゲームをしていた。社長をしている友樹の部屋ならきつと広いに違いない。普通のポリウムでゲームが出来るかもと一瞬思ってしまったが、すぐさま倅は否定した。人様の家でゲームをしたら、家主の存在を忘れてゲームに没頭してしまうのは目に見える。そんな行動を取ったらきつと友樹だけでなく、普通の人なら許さないだろう。

「じゃあ、今から俺の家に来るか？」

「ほえ」

「買物は今度でいい。今から着替えて、ゲーム機を持ってこい」

友樹は、グッズを買ってやろうとネットで検索までして店舗をリサーチしていたにも関わらず、予定を変更した。

一足先に友樹はアパートの前に止めておいた車の中で待っていた。倅の家の住所は課長から入手していた。それをカーナビに登録して倅のアパートに来ていた。カーナビを見つめて時間を潰す。

なぜだか今日はこのまま引き下がる気がしなかった。今日の予定は倅と過ごすと一度決めてしまうとそれをどうしても実行しなければ気が済まなかった。形はどうであれ。

倅は着替えを済ませ、大事なゲーム機を抱えてアパートから出てきた。友樹は運転席から降りて、助手席のドアを開けてやる。肩を落として倅は呟く。

「はあ、見られなくなかった」

「どうしてだ」

「私の快適居住空間を見られただけでも恥ずかしい」

「あそこのが快適なんだよ」

ゲーム機を預かり、後部座席に置いて倅に冷たい視線を投げつけた。

あの部屋はどう見ても環境が良くない。体に悪い気がした。

「テレビの前に座って、手を伸ばせば欲しいものが殆ど届くんです」

「なんて横着な……」

予想を裏切らない行動に、思わず吹き出しそうになりつつも友樹は車を走らせた。

## 第十話 社長の自宅

「想像と違う」

「一体何を想像していたんだ」

倅は高級なタワーマンションを想像していたが、友樹の自宅は一般的な賃貸マンションだった。お金を惜しまず、暮らす家にも妥協しないのだと勝手に思い込んでいた。

「ものすごい所に住んでいると思っていました。キッズルームやジムがあったりするのかと」

「それは分譲だろ。まあ、急を要しての引越だったからな。条件が合う所ならどこでも良かった。どうせ帰っても寝るだけだし」

オートロックを解除して、エレベータに乗り込む。十二階建ての七階に友樹の自宅があった。

友樹のドア越しにわずかながら犬の鳴き声が聞こえる。

ドアを開けると、主人を待ちわびた犬が尻尾をぶんぶん振ってお出迎えをしていた。

「犬を飼ってたんですか。これ、何ていう種類ですか？」

「まあな。たしか、ミニチュアシナウザーだ」

たしか？

倅は疑問を抱きつつも、犬の行動を観察した。

主人の顔を見ながら嬉しそうにその場を一周する。ふと見知らぬ顔が視界に入った犬は、倅と目がかちあった瞬間笑みが消え、瞳孔

が開いた。途端に口元を吊り上げ、牙をむきだして唸りだす。倅はこの犬を冷ややかな目で見つめた。

友樹に似て、可愛くない。

犬に威嚇されながらも、倅は気にせず部屋に上がる。

「犬の名前は何て言うんですか？」

「付けてない」

「え？ じゃあ、どうやって呼ぶんですか？」

「適当だ」

犬が少しだけ不憫に思えた。

同情の眼差しを向けたあと、倅は友樹の後に続いた。

賃貸といえども、家の中は広かった。倅もお返しとばかりに部屋を覗いていく。

玄関を入ってすぐ左に六畳、右には四畳ほどの部屋があった。足を進めると、右手奥に洗面所とお風呂とトイレ、少し先の左側にはカウンターキッチンが備え付けられていた。廊下を抜けると広いリビングが見えた。リビングは倅の部屋の二倍はあった。

「広い……、こんなところに一人で暮らしているなんて」

友樹はまわりつく犬を無視し、テレビの前に倅のゲーム機を運んでいた。

「わあ、すっごくおっきいテレビ……」

倅の目は輝いていた。友樹は思わず吹き出しそうになるのを堪えた。

「好きなだけ、遊んでいいぞ」

ラグの敷かれた床にぺたりと座り込み、倅はテレビにケーブルを繋ぎ始めた。セツティングを終えた倅は、ほくほくした表情でゲームの電源を入れた。

「音が良いー」

コントローラーを握りしめ、テレビの真ん前を陣取ってゲームを始めようとしている倅に友樹は思わず声を掛けた。どう見ても画面に近すぎる。

「おい」

倅と犬が同時に振り向く。友樹は犬のほうに視線がいつてしまった。尻尾の振り方が尋常ではなかった。友樹の視線の先に、倅も顔を向けた。

「もしかしてこの犬、自分の名前が『おい』だと思ってませんか？」

「まさか。そんな風に呼んでいる記憶はないが」

「おい」

倅が呼びかけるが無反応だった。

友樹が渋々その名前で呼ぶと、更に喜び、足元でジャンプした。

「ほら、やっぱりそうですよ」

そう言われてみれば、俺の口癖かもしれない。

友樹はこめかみを押さえた。

「とにかく、倅。画面からもう少し離れる。近すぎる」  
「あ、そう言われてみれば。自分ちのテレビの感覚でした」  
「それにしたって近すぎるだろ」

倅をソファーに座らせ、ゲーム機本体をガラステーブルの上に乗せてやると、コントローラを握った倅はすぐにテレビに釘付けになる。

ゲームを楽しそうにプレイする倅を見て、友樹は脇をつついてみる。すると変な声を上げる。

「なんですかつ、もう。ちょっとこっち見ないで！ ゲームがやりにくいです！」

倅の細い指で肩を押されても友樹は微動だにしなかった。友樹は倅の方に体を向け、ソファーにもたれて覗き込んでいた。

倅は友樹の行動のせいでどうにも集中できず、結局ゲームを断念した。

犬が少し離れたところで腰を下ろして寛いでいた。

「そっいえばこの犬、買ったんですか？」

「買った。というより強制的に受け取らされた」

「誰からですか？」

倅の顔を一瞬見た後、友樹は目を逸らした。

「女だ」

「ははあ、さすが女に不便していないだけありますねー」



倅は手元にあつたクッションを抱きよせ、ずるずるとソファに沈んだ。

友樹は咳き込むように答えた。

「さ、最近はそんな事はないぞ？」

反応が無くなったので倅を見るとソファに横たわり、寝息を立てていた。

「ありえん……」

毛布を倅の膝元に掛けてやる。床に座り、ソファに肘を置いて熟睡する倅の寝顔を眺めた。

長い睫毛だな。

睫毛にそつと触れるとびくびくと瞼が動いた。けれど目を覚ますことはなかった。

友樹は残っていた仕事を進めるために立ち上がり、書斎にこもった。

倅はゲームのやり過ぎで二時間しか睡眠をとっていなかった。ふかふかのソファに身を委ねた途端、倅は睡魔に襲われていた。

数時間後、倅は目を覚まし、友樹を捜し歩いていた。仕事に集中していた友樹はその声で手を休めた。

「そろそろ昼か。ご飯でも食べに行くか」

ジャケットを羽織り、財布の入ったカバンを取ろうと腕を伸ばす。

倅にその腕を掴まれた。

「私が、作ります」

友樹はその言葉を耳にした途端、苦虫を噛み潰したような顔を  
した。

『私の手料理、どう？ 美味しい？』

過去の女に押し付けがましく作っては感想を聞いてくるものが何  
人かいた。

私は料理ができるの。だから結婚相手として私を見て。

女たちは俺ではなく『社長』という肩書と収入に魅力を感じてい  
るのが丸見えだった。

結婚願望が無い友樹にとっては、それだけで重荷に感じていた。  
倅もあの女たちと同じなのかと、苛つきそうになる。

「外食はお金がもつたいないです！」

倅の声で、現実を引き戻された。

そしてすぐにその意味を理解した。

外食一回分で、ゲームソフトが一つ買えちゃいます。

倅ならきつとこう思うかもしれない。

友樹は笑い出した。

「えっ？ 私が料理できないかと思ってました？」

「ああ、そうだな。ゲーム以外でも得意な分野があるのか？」

「ありますよー。ゲームの為なら、節約の努力は惜しみません」

拳を作り、肘を曲げて見せた。

「おかしなやつだな」

腹がよじれそうなほど友樹は声を出して笑う。その姿に倅は不機嫌そうに口を尖らせていた。

倅のご機嫌を取るために、頭を引き寄せた。

「よし、食材でも買いに行くか。是非とも、倅ご自慢の手料理を食べてみようじゃないか」

「あー、何ですか。その上から目線は！」

「口に合わなかったら、外食だぞ。もちろん報酬から差し引く」

「それはダメです！ 契約違反ですよ！」

その日、何度笑ったかわからないほど、友樹の心は満たされていた。

## 第十話 社長の自宅（後書き）

先日は本当にお騒がせしました。

知らない方はどうかお気になさらずに><

（混乱を招いてしまった活動報告を非表示にしました）

連載再開しました。

## 第十一話 勘違い

定時後、倅は食材を買いつる為、自宅とは逆方向の駅に向かう。

「峯島さん」

振り返ると、同僚の黒井が息を切らせて駆け寄ってきた。少しだけ笑みをこぼして。

「帰りに会うなんて珍しいね。いつも退社する時は、あつという間に帰っていくのに」

「うん、今日は駅の方に用事があった」

「じゃあ、一緒に駅まで行こうか」

黒井は二十九歳。倅よりも三つ年下だった。ショートヘアに少しだけワックスを付けて、躍動感のある髪はふわふわと揺れていた。中肉中背ながらもスーツをぴったりと着こなし、清潔感がある。そんな彼はフロア内では爽やか好青年として、男女問わず好かれていた。話しやすいのもあるが、笑い声がとても心地よく、彼と話す相手は誰もがつられて笑ってしまうほどだ。

陰で彼のファンは多い。倅の耳にも届いていたが、やはり倅のタイプではなかった。

「あれ？今日はゲームの発売日じゃないよね」

「うん、違うよ。今日は必需品の買い出しなの。黒井、そういうば××買う？」

「それ、別機種で発売されるやつだろ？しばらくは様子見かな。面白そうではあるんだけどね」

「だよねえ。私は気にはなってるんだけど予算の都合上、見送ろう」

「思ってるの」

倅は購入するゲームソフトの数を制限していた。

今回の仕事が終われば、極秘の一時金が手に入る。

あの額からして一度や二度で終わる仕事だとは思っていなかった。いつ終わるかも分からない仕事だが、ここまでくるとお金が手に入るのは楽しみでならなかった。

どうせあぶく銭だし、元々無いお金だと思って、貯金せずに全部使ってしまったおう。友樹もそう言ってくれているし。

まず一番はじめに購入するもの。それは今まで逃していた諦められなかったゲームソフト。全部手に入れても余裕でお金は残る。

残りのお金の使い道、か……。

倅は呟き、すっかり日の沈んだ星空を仰いだ。

「引っ越そうかな」

黒井は目を瞬かせ、倅を見た。

「どうしたの？ 急に」

「んー。前から思ってたんだけどね。ほら私アパート暮らしでしょ。壁が薄いのが気になってたの。それにもう少し広い部屋に引っ越したいなと思って。ゲームだらけで人も呼べない広さだし」

友樹が来た時、座る場所がベッドか倅の定位置しかなかった。勝手に遊びに来たとはいえ、結局社長である友樹を立ちっぱなしで居させてしまった事を少々後悔していた。

そして友樹の自宅に行ってから、自分の部屋が窮屈に感じて仕方

無かった。

狭くてもいいからゲーム専用の部屋が欲しくなる。少しくらい家賃が上がっても、報酬でどうにか補えそうだし。

倅ははずれ手に入るであろう一時金の使い道を考えて、にまにましていた。

一方、黒井は目を見開いていた。

壁が、薄い！？ 壁が薄くて困る事って……。

しかも人が呼べないって、誰を呼ぼうとしてるんだ！？

駄目だ、頭がおかしな妄想をし始めた、と黒井は頭を振る。

倅はふと気が付いた。一時金を確実に手に入れる為には、この仕事を成功させねばならない事に。

友樹は会うたびに倅のファッションにいちいち辛口コメントを付けていた。

まずは見た目をどうにかしなければ。社長クラスの人が見ても、友樹に迷惑の掛からない格好が一番いいのだけだ。

「ねえ黒井。男性の好きな格好って何？」

「……え？ ……へ？」

「やっぱリスカート？」

「え、と。スカートも良いけど、本人が似あう格好なら何でもいいと思うけど」

顔を覗き込むようにして、倅に聞かれ、黒井はどきまぎした。自分のタイプを聞いているのだろうか。的外れな解答だけは避けなければと、無難な返事をした。

倅は以前、友樹に服装の事を尋ねた事があったが、ブランド名や聞きなれない服のデザインをつらつらと言われ、頭に全然入ってこなかった。要はどんな格好ならいいのか分からずじまいだった。そして黒井のざつくりとした返事で、やはりすつきりしなかった。

「そっか」

残念そうに答える倅を見て、黒井はすっかり自分の希望を口にす

る。  
「峯島さんはジーンズが多かったけど、時々着てくるスカートも似合ってたよ。膝上スカートにブーツとかもいいかも」

「……スカートか」

「黒井、ありがとね。私こっちだから。またね、お疲れ様！」

「お疲れ様」

黒井は、駅ビル内へと消えていく倅をぼーっと眺めていた。

「やべ、どきどきいつてら」

胸を押さえて黒井は赤面する顔を他人に見られないように俯いていた。

倅はとある店の前で立ち止まっていた。

やはりスカートがいいのか。これからの時期は寒いからパンツ系と思っていたけど、黒井の言うようにブーツという手もある。

店内をうろつく。適当にディスプレイのスカートを一つ手に取り、腰に合わせて鏡の前に立つ。



「うっ、短すぎ……」

どのスカートも膝上のもものばかりだった。ふいに友樹がスカートを好んでいたのを思い出す。文句を言われるよりはマシだ。仕方がない。

傍のマネキンに付けられていた札の文字が目がいった。その文字に目を通す。

「思い出した！ フェミニンがどうか言ってた。それってこのファッションの事なのか」

顎に手を当て、マネキンを睨み付ける。値札を探し出して覗き込むと自然と目が丸くなる。

「け、結構高い。しかもこれ、私に似合うの？」

わからない。だが、手持ちの服よりは全然マシだと実感する。

出費がかさんでしまいが友樹はお金持ちだし、いいよね。買ったやえ、買ったやえ。

倅は店員を呼びとめた。

そうして駅ビルを後にした倅の手には大きな袋がいくつも握られていた。小心者な倅はマネキンが着ていた上下以外は結局全てセーブル品を購入した。目的の食材も無事に手に入れる。

「こんなにいろいろ買うのって久しぶり。ウキウキしてる」

ゲーム以外で胸が高鳴るなんて。

この服を着て仕事に行くのが楽しみ。こんな楽しさを教えてくれた友樹に感謝しつつ、重たい荷物を何度も持ち替えながら帰宅した。

## 第十二話 どうなっているんだ

最近黒井の様子がおかしい。周りに関心のない倅にも、それだけは理解できる。

「倅」

下の名前で呼ばれてドキツとした。振り向くと黒井が背後に立っていた。

「くーろーいー。名前で呼ぶのやめて」  
「サチツ」

私は犬か何かかと、頭を抱えた。それでも尚、口を開こうとしている姿を見て口を押さえる。

「それ以上喋らないで！」

廊下まで黒井を連れていく。最近良く笑顔で話しかけてくるなとは思っていたが、今回はあからさまにおかしい。

「ねえ、悪いんだけど名前で呼ぶのはやめてくれない？」

「どうして？」  
「どうしてって、皆苗字で呼び合ってるでしょ？ どうして突然名前で呼ぶのよ」

「んー？ 俺がそう呼びたいから」

あどけない表情で倅を見つめていた。

「お願いだから名前で呼ばないでね？ わかった？」

そう言い残して、倅はフロアへと戻っていく。倅にくぎを刺されても黒井は微笑むだけだった。

「ふ、照れちゃって」

倅の姿を遠くから見つめていた。

黒井はこんな男だったっけか？

倅は首を傾げつつも、仕事を再開した。

黒井が熱い眼差しで倅を見ている事に気が付いていないのは、経理部の中では倅一人だけだった。

ある日、残業を終わらせた倅は腕時計を見ながら、ロビーを足早に駆け抜ける。

「倅」

声のする方向をみると、黒井がロビーで佇んでいた。名前で呼ばないでって言ったのに。

「どうしたの？ 帰らないの？」

気が付くと左腕を掴まれ、倅は走り出していた。というより黒井に引つ張られ、ロビーとは逆側の物陰に連れて行かれた。ふと視界が回り、背中を壁に打ち付けられて止まった。正面には腕を伸ばした黒井が立っていた。

「く、ろい？」

顔をあちらこちらへと向かせては何度も溜め息を吐いていた。

「……倅、あのさ」

「何？」

やっとの思いで黒井はその言葉を口にする。

「その、倅は好きな人、いるよね？」

「す、きな人？」

好きな人物と言えば、ゲームキャラである。多数のお気に入りキャラが頭の中で思い描かれる。今のところ好きと言えばあのキャラかな、なんて想像する。途端に顔の筋肉が緩む。

その表情を見た黒井は何かを悟ったかのように話し出す。

「その、自惚れていいのかな」

はっと顔を上げると、黒井の顔が急接近していた。そして腕を折り曲げながら距離を縮め、黒井の体が密着してくる。倅は咄嗟に両腕で胸元をカバーした。

「たっ、たんま！」

黒井の腕を掴んでそれを阻止し、しゃがんでその腕の中から抜けた。倅は後ずさりつつ、手のひらを見せ、来るなど示した。さすがの倅でもこの行動は何となく理解できた。ゆっくりと首を振りながら倅は言葉を選ぶ。

「黒井、これはちょっと……」

伸ばしていた腕が引つ張られ、倅の体は黒井の胸へすっぽりと収まった。黒井は両手を回して倅の体を抱きしめ、肩に顔を寄せた。倅は胸元に空間を作るために、黒井の胸に腕を挟んだ状態で動けなくなった。耳元に唇を押し付けられ、倅は悪寒が走る。

「最近綺麗になったよね。それってさ、俺の事が好きだからって聞いたけどホント？」

倅はその言葉に度肝を抜かれた。誰だ、そんなデマを流している奴は……。

「違う、違うから。離して？」

「なんで嘘を吐くの？俺の好みの服装まで聞いたりしてきたよね？」

「俺も、倅の事……」

さらに力が籠り、倅は呻き声を上げた。

早くなる鼓動が倅の思考の邪魔をする。パニックになりつつも解かれない腕の中で倅は必死にもがいた。この年になってこんなハプニングがやってこようとは思わなかった。どうにか切り抜けるために必死に頭を回転させる。言葉の続きを聞いてはいけない。脳が危険信号を送り続ける。

突然友樹の顔が脳裏をよぎった。

「い、言っただけで私、彼氏がいるの」  
「前に聞いた時はないって言ってたよね？」

「そう言う事だったのか……」。

倅は青ざめた。たしかに以前、食堂でそんな話題になった事があった。その話題は黒井が持ちかけたものだった。

「彼氏がいるとか言いだしたのはさ、それを聞いて俺が簡単に諦めがつくほどの想いなのかどうかを試そうとしてるの？ 俺、別に軽い気持ちや冗談で言ってるわけじゃ……」

「違うんだってば！ ちょっとだけ時間頂戴」

その言葉に黒井は力を抜いた。倅は鞆から携帯電話を探す。僅かに手が震えていて、ボタンがうまく押せなかった。なんとか着信履歴から友樹の電話番号を探し出し、コールする。

「お願い、出て。」

携帯電話を握りしめた。コール音が止まり、いつもの憎らしい声が聞こえてきた。

「なんだ」

「と、友樹？ 今どこ？」

「……会社だ」

「お願いがあるの。ロビーまで来てくれない？ 彼氏でしょ」

「今忙しい」

ブツツと相手から一方的に切られた。倅は携帯電話の通話終了時間を見届け、手が震えだす。

「この薄情者が……！」

「……」

背後から抱きつかれて、動揺した。腕が絡まってほどけない。

「ちよっ……とっ!」

「何、今から彼氏来るの?」

「こ、来れない……」

「それさ、電話するフリしただけじゃないの」

「ちがあう」

耳元で囁くようにして息を吹きかけてくるのはわざとなのだろう。体をどうにか反転させ、黒井の体を全力で押した。腕が緩んだので慌てて後退するが、携帯を握っている腕が捕まり、再び胸の中へと引き寄せられた。

「勘違いしてるようだけど、私黒井の事は同僚としては好きだけど、そっいつた恋愛感情とかは無いから!」

「……倅」

「ちよっ、苦しいってば」

ますます腕の力を強めた。大きな胸の中で倅は黒井から『男』を感じて、ただただ恐怖だった。

黒井の真剣な眼差しは「好き」という返事しか待っていないような気がした。

「お願いだから、離して!」

「おい」

この声は。



背後から声を掛けられ、倅は振り向いた。

息を切らせた友樹がそこに居た。髪が乱れていた。その姿を見て倅はほっとした。ふと力の緩んだ黒井から離れ、友樹の腕に絡みついた。が、友樹の腕はだらんと力が抜けたままだった。彼氏のフリをしてもらうために倅は友樹の手を両手で握るが、またしても反応が無かった。

どうやら友樹は倅の彼女のフリはしてくれないようだった。倅は友樹に期待するのをやめ、一人で演じてその場を立ち去る選択肢を選ぶ。

「彼が来たから、またね」

その場を離れようと友樹の腕を引っ張るが、彼は動こうとしなかった。友樹はずっと黒井を見ていた。というより睨んでいる？

「倅、こいつは誰だ」

こいつ呼ばわりされた黒井は明らかにムツとしていた。

「お前こそ誰だ」

男同士の対峙する緊張感で、さらに空気が張り詰める。

黒井、社長に対してその口調はやばい。やばい事になってきている。省エネで暗くなっているロビーのせいか、黒井も友樹の正体に気が付いていない様だった。

とにかく二人を引き離れた方が良さそうだと判断し、友樹の背中を押した。友樹は押された勢いで少しずつではあるが足が前へと進み始めた。

「黒井、じゃあね」

「待てよ倅、そいつ本当に彼氏なのか？」

「そうよ。今まで黙っててごめんね。社内恋愛なの。お願い、皆に言わないで」

倅が言い終わる頃、友樹の大きな手で肩を引き寄せられた。倅が顔を上げると同時に、友樹は唇を重ねてきた。

「ともっ……」

私の時は頬にキスの真似事だったのに、いきなり唇!?

倅は混乱していた。

友樹は倅越しに、黒井を睨みつけていた。それは倅のほうから見ることはできなかった。

## 第十三話 嫉妬

どうにか修羅場を乗り切れた倅は胸を撫でおろしていた。友樹は倅の顔を見ようともしせず無言で歩き続ける。倅はどうしたらよいかかわからず、ただ友樹の後ろに続いていた。重たい沈黙を破ったのは友樹だった。

「あいつはお前とどういう関係だ？」

「黒井？ 同僚ですけど」

「仲がいいのか？」

「いいというか、ゲーム仲間というか……」

表情は見えないが、明らかに友樹の声が低い。友樹が突然立ち止り、倅は友樹の背中に鼻をぶつけた。友樹は振り返るなり、声を張り上げた。

「そんな間柄のヤツに、お前は倅って呼ばせるのか？ どう見ても年下だろっ」

「え？」

馴れ馴れしい、と呟いた。

倅は鼻をさすりながら、言葉の意味が理解できずに眉根を寄せた。  
いた。

「飲みに行く。付き合え」

倅がきよとんとした顔をしていた。友樹は溜め息を吐いた。

「……仕事抜きだ。たまにはいいだろ？ 倅、ここで待ってる。鞆取ってくる」

倅もすぐに帰る気にはなれず、友樹に従った。エレベーターの脇で大人しく待っている。友樹が戻って来て、力強く倅の手を引く張った。会社の外には既にタクシーが到着して、それに乗り込んだ。

今日の友樹も様子がおかしい。

なんというか、眼差しが熱く感じるのは気のせいだろうか。その潤んだ瞳はお酒のせい？

移動中は全く倅の顔を見ようとしなかった友樹が、居酒屋についた途端に見つめられている感じがする。その視線はとても痛かった。

友樹を凝視できない。視線が合うたび、倅は不思議と瞬きの回数が増え、こちらまで目が潤みだす。

そうか、瞳が乾いてきているのかもしれない。

倅はそれに気が付き、コンタクトから眼鏡に掛け直して席に戻る。けれどそれは眼鏡に変えても変わることはなかった。

突然倅の目が見開いた。

倅はその原因となる所へ視線を落とすと、友樹の手が倅の左手の甲の上にそつと乗せられていた。右手にビールジョッキを握りしめたまま動けなくなる。

今度は背中にぞくりと何か走った。原因は手の甲の表面を摩ら  
れ、そのまま指先を優しく握られた事によるものだった。

「と、友樹？」

友樹は無言のまま、黒井に握られていた手首を見つめていた。あ  
の時の光景を思い出すだけでムカムカしていた。

「んっ、ちよつと！」

返事をしない友樹は不可解な行動を続けていた。  
倅にはその行動が全くと言っていいほど理解できずにいた。

時折指を絡ませたり、ずっと撫でられる。その触り方が少々いや  
らしく感じた。

料理を取るフリをして、左手をそこから救出した。

ほつとして料理に手を付ける。しばらくするとつま先にこつんと  
何かが当たった気がした。倅はテーブルの脚だと思い、気にせず食  
事を始める。今度は足首を挟まれ、ぐつと前に持つていかれた。

皿をテーブルに戻し、足元を覗き込むと友樹の両足が倅の足を挟  
み、こすりつけていた。

「な、何やってるんですか！」

足を手前に引いて、そこから脱出させた。

挟まれた足をさすりながら倅は友樹を見据えるが、友樹は無表情  
のまま倅を見続けていた。

『飲みたい』と言っていただけあって、友樹はハイペースでアルコールを摂取し続けていた。ピッチが早かった友樹の顔は赤くなっており、とてもダルそうだった。

気が付けば飲み始めてから既に一時間半ほど経過していた。これ以上飲ませては体に悪いと倅は判断した。

「今日はそろそろ帰りましょう?」  
「嫌だ」

即答した友樹は机に突っ伏して肘をつき、もの言いたげな様子で倅の目をじっと見ていた。

「な、なんですか?」  
「うちで飲み直そうか」  
「ダメです。飲みすぎですよ」  
「じゃあ、うちまで送ってくれよ。……一人じゃ帰れない」

ずるずるとテーブルを伝って倅の手首を掴み、上目遣いで見つめていた。

どうしちゃったのよ、一体。  
本当に酔っぱらい過ぎ。  
頭を押さえた。

「もー。今日の友樹、ちょっと変」  
「変じゃない」

送ることを了承すると、ようやく納得した友樹は立ち上がるが足元がおぼつかなかった。倅は慌ててその体を支えて会計まで付き添

った。

会計を済ませた友樹は、そのまま倅にもたれかかる。店外に出て  
も、友樹は倅から離れなかった。

「重いい」

倅の肩に手を回して顔を近づけ、友樹は顔を覗き込んでいた。顔を  
凝視され、その痛い視線に耐えきれず、前を向いた。

「ほらっ、タクシーが来ましたよ」

会計前に頼んでおいたタクシーに友樹を何とか押し込み、倅も同  
乗すると車は走り出した。

「倅、部屋で飲み直そ？ な？」

倅の肩に頭を乗せて、友樹は呟き続けた。

「飲みませんってば。なんなの、この甘えん坊さんは」

こんな状態の友樹を放ってはおけず、倅は自宅まで送るつもりで  
いた。

友樹の暮らすマンションに辿り着き、倅は友樹を肩に背負って歩  
き出す。

「友樹、重たい。ちゃんと自分の足で歩いてえ。あつ、また手が」

ぱちんと手をはたくと、友樹の手は一瞬離れるものの、すぐに倅  
の腰に手を回す。

んもっ、酔っぱらいめ。

「着きましたよ。私はこれで帰りますからね」

玄関先まで友樹を無事届けたので、倅は帰ろうと立ち上がる。

「ベッド。ベッドまで運んでくれよ」

「えー」

友樹はだらしなく玄関に腰を落とし、腕を伸ばした。顔を上げると、距離を保つて後ずさっていた犬が倅を凝視していた。

この犬に後を任せて帰れたらどんなに楽か、などと現実逃避を試みるものの、結局このまま放置する事ができなかった。

「世話がやけるんだからっ」

倅は友樹の靴を脱がせて、ずるずると寝室まで運び込んだ。

ベッドが見えると友樹は自ら、布団の上にダイブした。

倅は肩を叩き、ほっとしていた。

友樹の姿を見ると、相変わらず吸い込まれる様な眼差しを向けていた。

お酒のせいでそんな表情になっているだけかもしれない。倅はそう思った。

落ち着きのない犬を見て、倅は台所へ移動して犬に餌を与えてみる。犬は餌と倅を交互に見た後、一心不乱になって餌にぱくついた。

よし、任務完了。

靴を持ち、もう一度だけ寝室を覗くとだらりとした格好で友樹は横になっていた。高級なスーツを着たまま。あのまま本当に寝てしまっているのかと心配になる。



「友樹っ、スーツ脱がないとしわになっちゃっから」

あの男には抱きしめさせるくせに、俺は触れることすらだめなのかよ。

そう気が付いた瞬間から、気持ちが抑えられなくなっていた。

初めて倅から電話が来て嬉しかった。嬉しさをごまかすためにぶつきらぼうに電話に出てしまい、反省した。倅のほうから来てほしいと頼まれていけないわけがない。それをうつかり忙しいだなんて言ってしまったこの口が憎かった。今ならまだ間に合うはずと、足早にロビーに駆けつけてみれば、抱き締め合っているシーンを見せつけられ、拳句の果てには男に名前と呼ばせていた。

この胸のざわつきは何なんだ。

部屋を出たはずの倅が戻ってきたので、視線だけを倅に向ける。

倅がスーツの上着を脱がせるために、友樹に腕を伸ばす。

友樹は近づいてきた倅の眼鏡を取り上げた。倅の頭を引き寄せると倅はベッドに手をつき、真顔になって必死に距離を保とうとしていた。

「友樹？」

今まで、いろいろな女が俺の名前を呼んできたが、倅に呼ばれる

のが何よりも心地よかった。

ああ、俺はこいつの事が好きなのか。

そう自覚すると共に、倅の体を引き寄せて唇を重ねた。

これは夢か現実なのか、ここで友樹の記憶は途切れた。

## 第十三話 嫉妬（後書き）

誤字が多くてすみません。何度も読み返しているのですが…。

## 第十四話 好きの自覚

「ん」

友樹は目を覚まし、腕に力を入れると何かを抱きしめた。

何だ？

顎のあたりに女性の頭が見えた。腕の中にいる女性も目を覚まして、体を反転させた。

「社長、おはようございます」

その声に驚き、腕を広げた。倅はようやく腕から解放され、体を起こした。

「まだ五時か、良かった。シャワーを借りてもいいですか？」

「あ、ああ」

どうなってるんだ？

互いに昨日の服を着たまま寝ていた。

ふと昨日の事を思い出すと途端にむかむかしてきた。別の男にやすやすと体を触らせ、しかも下の名前を呼ばせるなんて。その後は。

「そうか、昨日飲みを付き合わせて、そのまま送ってくれたのか」

しかしなぜ抱きしめて寝ていたのかが思い出せなかった。

思い出そうとすると邪魔をするものが現れた。

フローリングの上を、チャツチャツと爪音を立ててそれはやってきた。足元で犬が、尻尾を振ってこちらを見ていた。放っておくと朝っぱらから吠えかねない。

ずきりと痛む頭を押さえながら、餌を用意してやると無我夢中で食べ始めた。

テーブルに腰かけ、肘を置いて頂垂れた。

「あの女のどこがいいんだ？」

自問自答してみる。

同じ家において、今シャワーを浴びているのだと思うだけで体が熱くなり、頬が緩んだ。

「はあ、だめだ。自覚した」

倅に対して独占欲が芽生えていた。

倅はシャワーを浴びながら、壁に手をついていた。

昨日の友樹は別人のようだった。昨夜の事を思い出し、倅は指先を唇に運ぶ。

一度ならず二度までも。

キス、された。

恋愛に疎い倅にはそれだけで刺激的だった。

誰かと勘違いしてるのだと思った。けれど。

『倅、どこにいくんだ』

ベッドに寝かせた友樹が倅の腕を掴んでベッドに引き込み、背後から抱き締めた。

『どこにもいくな。ここで寝ろ』

腕に力が籠り、倅は友樹から逃げられなくなった。すぐに寝息を立てた友樹の腕から逃れようとするたびに、友樹は目を覚まして胸の中に引き戻す。

そして耳元で、くすぐるように名前を呼ぶのだ。

『……倅』

そのたびに愛おしそうに抱きしめられた、気がした。

太い腕の中で、倅の心臓は破裂寸前だった。ドギマギと興奮状態だった倅は殆ど眠れずにいた。

「ああ、頭から離れない」

社長の胸、意外と広がったな。

腕の中にいた自分を思い出すだけで、シャワーで温まった体とは別に、頬が紅潮していく。

勘違いしちゃダメ！

頭を振り、こつんと壁に額を当てて溜め息を吐いた。

「あんなことされたら、誰だって本気になっちゃうよ」

普段と違う優しい声。それを思い出すたびに眩暈を起こしかける。シャワーの音が耳に届き、それを顔で受け止めて左右に振った。

フリを頼んだだけで、本気になられたら困るって言ってたじゃない。

忘れなければ、と倅はやりかけのゲームの事を必死に思い出す。けれど今度は居酒屋の帰りの事が思い出される。途端に頬が熱くなり、自分の体をぎゅっと抱きしめた。

何度も体を触られた。

腰だけではなかった。脇腹から胸元に何度も手を滑らせてきたりもした。

「うおおお、社長のえっち、えっちー！」

今日は『友樹』と呼びたくなかった。距離を置いた言い方をしないと意識してしまいそうだった。

シャンプーのポンプを数回押し、頭を洗い始めた。そしてそれを流すために思い切り目を瞑る。顔にシャワーのお湯が滴り落ちる。少しだけ涙も混ざっていた。

「大好きなゲームの事が思い出せないよおお」

唸りながら、必死に体を洗った。

入社時、友樹が呼んだタクシーに同乗し、家の近くまで送ってもらった倅は部屋で着替えていた。

「やだ、これ」

倅は体や髪の毛先を鼻先に運んでは嗅いでいた。

「なんだか体から社長の香りがする」

社長の力・オ・リ。

途端に顔が熱くなる。

「うおおおう。どうなってんの！ 顔が熱いよお」

隣の部屋から壁を叩かれた。

条件反射で「ごめんなさい」と詫びた。ゲームに夢中になり、唸り声を上げては良く隣人に注意を受けていた。

職場に行くと黒井が申し訳なさそうに倅のもとへとやってきた。

「峯島さん、ちょっといい？」

黒井の顔を見て、はっとした。昨日の黒井との出来事がすっかり頭から抜け落ちていた。きっとその件だと倅は悟り、静かに黒井の



後を追う。

倅と黒井は人のいない通路の隅に移動した。

「昨日はごめんな」

「ううん、私の方こそ何か勘違いさせちゃってみたいで」

互いに俯き、言葉を選びながら口に出していた。

「その、彼氏さんの事は誰にも言わないから」

「ありがと。……あのさ」

「ん？」

「黒井は、私じゃなくて清野さんの方がお似合いだと思うな。昨日の事はお互いに忘れようね。先に仕事に戻るね」

倅は言うだけ言って、さっさとフロアへと消えていった。

黒井は呆然としていた。

清野って、清野妙子の事だよな。

どうして突然そんな話題に飛ぶのか、黒井は理解できなかった。

清野妙子は同じ経理部の二十三歳の女性だった。肩までの長さで髪にふわふわしたウェーブを掛けて太陽のように明るく笑う印象しかなかった。

清野の事を思い出していると、偶然ゲーム仲間の一人が横を通り過ぎた。

「おい、お前らのせいでとんでもない恥をかいたぞ」

「何のことだ？」

黒井は腰に手を当て、イライラを吐き出した。

「峯島さんに告白したらフラれたじゃないか。どこが俺の事を気にしてるだよ。お前たちがそのかすから俺、本気にしちゃって恥ずかしい思いをしたんだからな」

「えー！ 本当かよ……。それは悪かったよ」

毎日のように茶化したり、煽ってしまっていたその男は負い目を感じる。

罰が悪そうに彼は黒井の肩を二度叩き、肩を並べて一緒にフロアに戻った。

ふと黒井は、倅に清野の名を言われた事を思い出す。

頭を捻りながら清野の席を見る。すると彼女と視線が合った。彼女は露骨に視線を逸らした。

なんだ？

それはかなりの確率で起き、数か月後二人は交際へと発展していく。

## 第十五話 調子に乗りすぎると嫌われる

しばらくして仕事の依頼があった。倅はどんな顔をして会えばいいのか分からずにいたが、友樹は普段通りの不満げな表情で姿を現し、それを見て安堵した。

いつも通りに会話を楽しみ、そのひとときは終わろうとしていた。会計を済ませる為に倅と友樹は立ち上がる。突然友樹が倅の耳元に顔を寄せた。

「倅」

「ちょっと、顔が近いっ」

耳に吐息がかかり、むず痒かった。倅はびっくりして肩を押そうと手を掛ける。

「後ろ。取引先の社長たちがこちらを見ている」

倅は友樹の肩越しに、視線を向けている男性陣を見つけ出す。彼らの一人が立ち上がり、こちらへやってくる。

「今晚は。やっぱり谷川社長でしたか」

「ああ、合崎社長。こんばんは。今日はこちらで接待ですか？」

白々しく友樹は返事をしていた。友樹の手は倅の肩を捉えたまま離さない。倅はそれを振りほどきたかったが、フリが開始された合図とも取れ、諦めることにした。友樹の肩から二の腕へと手は滑り落ちた。

社交辞令的な挨拶もそこに合崎と呼ばれた男は、親しげに見える倅に視線を向ける。

「そちらの方は？」

「私の未来の妻ですよ」

妻！？

倅とその男は同時に友樹の顔を見た。友樹は幸せそうに答えていた。

「ああ噂はかねがねお聞きしていましたが、交際されているというのは彼女でしたか」

「初めまして、峯島倅と申します」

友樹を突き放し、倅は条件反射で挨拶をしてしまう。

失敗した。何してるの私！ 名乗る必要なんてないのに。

友樹の言葉に動揺して、まともな行動がとれなくなっていた。倅は頭が上げられなかった。

「あ、申し遅れました」

相手の社長は名刺を差し出し、挨拶を返す。互いに気恥ずかしさを見せて微笑み合う。

倅はボロが出ないように一歩下がり、友樹の陰で大人しくしていた。

二人は当たり障りのない話をした後、立ち話が終わる。

「お幸せに」

最後に合崎社長は倅に向けて言葉を掛けた。倅は微笑み、会釈を

する。

合崎社長は二人が店を出るまで頭を何度か下げて見届けた。

「思っていたのと随分違うタイプの女性だったな。だが……、どう見ても谷川社長のほうが彼女にぞっこんだった。あれではうちの娘が入り込む隙間は無いはずだな」

目尻とほづれい線に深いしわを作り、観念したかのように笑みを零した。

友樹はわざと倅の髪を手悪戯で弄びながら店を出た。倅は緊張から解かれ、友樹を押し離す。

「寒っ」

温度差で身震いさせた倅の体を見て、友樹はコートの前を開け、背中を向けていた倅を胸の中に包む。

「何しちゃってるんですか」

「寒いって言ったから」

倅はふりほどくことが出来なかった。友樹の懐が温かくて心地が良かった。

「外ではもうフりはいいんじゃないんですか？」

「念のために、もう少しだけ。倅も、倅の方からも恋人らしく振舞ってくれよ。俺ばっかりだと変だろ」

「んむうー」

倅は反転させて友樹の体に納まった。見上げると友樹は優しい瞳で倅を見下ろしていた。

心臓が一度だけ強く打ち、くらりと眩暈がした。意識が飛びかけたのでそれを防ぐために力一杯目をつむり、そして目を開ける。

こ、これは。

倅は目を見開いた。

ゆっくりではあるが友樹の顔が大接近していた。

唇に視線がいつてしまい、倅は先日の出来事を思い出してしまった。冷たい空気とは裏腹に途端に耳は熱くなる。

「……顔が近いですってば」

肩に顔を押し付けて、倅は逃げる。が、突然視界が戻された。

「？」

友樹に片手で体を支えられ、もう残りの手で頬を持たれて顔を上向きにさせられていた。友樹は何かに耐えるような表情でさらに顔を近づけ、瞼を閉じていく。

ちよつと何なに!?

「だめっ!」

フリでもキスをされてはたまったものではない。前回のキスだけでもフラッシュバックが凄すぎて、ただでさえ生活に支障をきたしていた。

倅は咄嗟に友樹の顎を押し上げた。

友樹はその手を掴み取り、倅の口元に唇を押し当てた。柔らかくて温かい感触を味わう。そして倅の体を抱きしめ、顔を緩ませる。愛おしい、と思った。胸の奥が温かくなる。

寒がっている倅を抱きしめた時、抵抗されなかった。そして突然目を瞑られ、その顔を見た途端無性にキスがしたくなっていた。

「いいだろ、キスの一つや二つ」

「一つや二つじゃありません！　これで三つ目なんですからっ！」

倅の表情が見たくなり友樹は顔を覗き込む。そして固まった。倅は涙目だった。

もの凄い口の形だ。

倅は『への字口』をしていた。唇を僅かに震わせながら。

心臓を掴まれた気分だった。なんて不快そうな顔をしているんだ。友樹は静かに倅から離れた。

「悪かった。そう怒るな」

友樹はエンジンをかけ、暖房を入れる。助手席に身を預けた倅の頭を撫でるが反応がなかった。

倅は助手席側の窓から外を見ていた。背中が明らかに怒っている。友樹は倅に聞こえない程度の溜め息を漏らし、車を走らせた。

女の方から愛想を尽かされたり、嫌われるのは慣れていた。だが倅にされたこの態度に対し、友樹の心は深く傷ついていた。調子に乗りすぎたか、と少しばかり涙がでそうだった。

空気が息苦しく、心を落ち着かせられそうなBGMを探して掛け

る。

無言のまま、倅の自宅前に到着した。

「今日はすまなかつたな。お疲れ様」

「……お疲れ様でした」

倅は友樹の顔を見ようとせず、シートベルトを外して静かに降りて行った。

友樹は脱力してシートにもたれた。

鼻声、だった。

そんなに嫌だったのか。

それもそのはずだ。フリで相手に本気になられては困ると言ったのは自分だろう。その通りにしてくれている相手に、俺は一体何をしているんだ。

嫌われた、と気が付いた途端胸が苦しくなる。

手のひらを見つめ、抱きしめた倅の温もりを思い返していた。



## 第十六話 恋なんかじゃなかった

手元の書類を見ながら倅はひたすらテンキーを打ち続ける。

ぴたり、と指の動きが止まる。視界に入った受話器を見つめ、倅は放心する。

仕事に集中する自信はあった。けれど友樹に関連するものを見たり聞いたりするだけで、頭の中は友樹の事で一杯になる。

三度目のキスをされて、倅は気が付いてしまった。友樹に恋してしまっている事に。

憎たらしい顔を思い出すだけで顔が火照る。友樹が酔っぱらっていた時の眼差しも、ベッドの上で囁かれた声もどうしても頭から離れない。

その事を忘れてたくて家でゲームをするも、集中力が切れるたびにどうしてもそちらに引き戻されるほど重症だった。

頭を抱えて倅は唸りだした。

「ぐおお、あんな事さえなければ、こんな事にはならなかったはずなのにいっ！」

気付きたくなかったよ、こんな気持ち。

友樹は、ノリでキスが出来る人。そういう男だから女に困っていないのだ。

色々考えるだけで気分が悪くなる。好きでもない人と簡単にキスが出来る友樹が許せなかった。

「仕事、しなくちゃ」

これ以上余計なことを考えたくなくて、仕事を再開するために手元の書類に視線を落とす。

仕事？

頭からすっかり抜け落ちていた事を思い出す。これはそもそもビジネスであって、好きとか嫌いとか関係のない話だった。友樹は単にこの仕事を成功させる為に、やむなく取った手段だったのかもしれない。一度目は彼氏のフリをしてくれるため。二度目は、酔っぱらった勢いで……。二度目はちょっと許せることでは無かったけれど、三度目は確実にビジネスのため。全力でやれと言われた事を思い出す。そう考えると友樹の前回の行動は何も悪くなかった。

慣れていない恋人のフリなんてしていたから、『恋』と勘違いしただけかもしれない。

途端に倅の顔は明るくなる。

「どうしてそれに気が付かなかったかなー」

倅は携帯電話を掴み、フロアを出た。歩きながら友樹の電話番号を表示させる。エレベータが見えた所で発信ボタンを押した。

今週、友樹は会社で仕事だと言っていた。十九時を過ぎていたが、まだ会社にいるはず。

エレベータ脇の全面ガラス窓に手を掛け、街の明かりを眺めながら発信音を聞いていた。

『倅、か？ どうかしたか』

友樹の柔らかい声を聞き、倅は俯き、笑みを零す。

「あ、あのね。今日って予定ある？ たまには仕事抜きで食事なんてどうかなって思って」

『……………』

堅苦しく誘うつもりがつかられてすっかりタメ口になってしまった。無言が続く。

「？」

倅は携帯電話の画面を覗き込むと、通話時間は継続していた。もう一度耳に戻す。

「もしもし、繋がってます？」

『……………あ、ああ。どうして仕事抜きで食事がしたいんだ？』

珍しい。友樹が電話で倅の意見を聞いてくるなんて。倅は不思議な感覚に襲われた。ガラスに背中を預けて、天井を仰いだ。

「えっと、実は前回の事を会って謝りたくて」

『分かった。今会議中なんだ。三十分くらいで終わると思うから、終わり次第すぐに連絡する』

「わかりました」

連絡は携帯電話にしてもらった。倅は仕事を片付けてリフレッシュルームでパックのジュースを少しずつ飲みながら待っていた。た

くさん飲むとそれだけでお腹が満たされてしまいそうだった。  
時間よりも早く着信があり、倅はロビーの脇で友樹を待つ。

コートと鞆を無造作に脇に抱えて友樹は息を切らせてやってきた。  
その足を止めることなく倅の手を取り歩き続ける。

「悪い、待たせたな」

「いいえ。会議、結構早く終わっただんですね」

「いや、無理やり終わらせてきた」

友樹は綻ぶ顔を隠さなくなった。その表情で倅を見つめると、すぐに視線を逸らされた。倅の体が冷えてしまっていないかが心配で、足早に駐車場へと連れて行く。

「会議中とは知らずに電話してすみません」

「いや、いいよ。幹部会議だし。会議と言っても数名での打ち合わせ程度のものだからな」

車に乗り込むと、友樹はすぐに暖房をつける。倅はシートベルトを付けながら口を開いた。

「今日は私をご馳走します。といっても高いところは無理ですけど」「  
いいよ、無理するな。どこに行く？」

「お店はあんまり知らないんですけど、友樹の行きたい場所があったらそこで。あんまり高くないところでお願いします」  
「わかった」

店に到着して駐車場に車を止め、倅と友樹は店へと歩き出す。

「ごめんなさいっ」

店に入る前に倅は頭を下げた。友樹はその姿を見て呆気にとられる。

「どうして、謝るんだ？」

「だって、前回帰り際に霧困気を悪くさせてしまっただけ」

「それは……。俺がフリで調子に乗ったせいだろ。嫌な思いをさせて悪かったな」

フリで調子に乗った……。

ほらやつぱり仕事上の付き合いだった。気が付いてよかった。ほっとしたような、悲しいような。ちくんと胸の痛みを覚えつつも、倅は頬の筋肉に力を入れて必死に笑った。

「友樹は悪くないです、これは仕事なのに。私……、感情を表に出すなんて最低でした。ただ、キスはできれば無しにして下さいね。寒いのにこんなところで立ち話してすみません。さあ、入りましょ」

友樹の背中を押して、倅は店内に入った。

仕事……。

友樹はその言葉で一線を引かれたと認識する。当たり前だ、これは仕事上の付き合いなのだ。心臓をえぐられるようなショックを受けつつ、背中を押している倅の手がとても温かく感じた。

店内に入るとそこは個室だった。コース料理だったけれど、一名三千円程度からだったので、倅はほっとしていた。

「寒い夜には鍋もいいだろ。鍋だとそんなに太らないって聞いたことがあるからな」

友樹は倅の為にこの店を選んだ。高い店だと落ち着かないだろうから、と。個室がある所を選んだのは友樹の個人的な感情からだっ  
た。

「結局ごちそうになってしまつてすみません。美味しかったです」

倅がいつもどおり笑顔を見せる。倅に嫌われてしまったと思つていた友樹はそれだけで気持ち軽くなる。

「仕事、よろしく頼むな」

「はい」

倅は軽い足取りでアパートへと帰っていった。

「……仕事、か」

倅と契約した仕事の方はあらかじめ片付いていた。だけど終わらせる引き際のタイミングを濁しているのは友樹自身でもあった。

「あの調子だと、仕事が終わってお金が入ったらゲームに夢中になるだろうな」

これからどうすべきか、今後の事を考えながら友樹は帰路に就く。

## 第十六話 恋なんかじゃなかった（後書き）

眠いです。完成している作品を手直ししながらアップしているのですが、どうにも睡魔が邪魔をして…。

次回の更新は週末になりそうです。

誤字脱字やらを沢山やらかしていそいな気がします…。

## 第十七話 目撃

友樹は多忙になり、倅と絡む事が無くなった。

倅は携帯電話の着信履歴をチェックする日課が出来てしまう。

「はあ」

帰宅してもゲームをする気になれなかった。

倅は駅前のスーパーで食材を買いに行く。必要最低限の食材を購入し、ゲームショップに足を運ぶがどれを見ても心が全くときめかなかった。いつもなら店内の隅々の商品チェックをするのだが、そんな気分にもなれず、入口の売れ筋ランキングをぼーっと眺めた後、倅は外に出た。

気温が下がり、外は既に日は沈んでいた。とぼとぼと足を動かすと駅の看板が眩しいくらい煌々と輝いている。自動改札から時折聞こえるメロディが耳に届いた。そちらをみると改札口から綺麗な女性が出てくるところが見えた。女性は辺りを見渡し、誰かと待ち合わせをしている様だった。その女性はすぐに笑みを零す。その視線の先には待ち合わせていた人物が小走りで駆け寄る。

スーツを着こなした、体のがつしりした感じ。見た目はまるで友樹そのものだった。

え、友樹!?

足元から血の気が引いていく。見間違いではない、本人だ。倅はその二人から視線を外すことが出来なかった。

なんて綺麗な女性なのだろうか。暗がりながらもそれは見て取れる。華奢な体。頭からつま先までお金をしっかりと掛けて女性を磨



き上げた完成品。動作一つに品がある。そんな彼女と、友樹は肩を並べて笑っている。倅の存在に気が付かずに。

彼らの向かう先には友樹の車が停車していた。助手席にその女性を乗せると友樹は小走りで運転席に戻る。ハザードランプを消して車は走り出した。

見たこともない優しい顔してた。

ジリジリと胸が痛みだす。

助手席は自分の特等席だどこかで自惚れていた。あの綺麗な女性が座った瞬間から、私の居場所はそこではないと見せつけられた気分だった。

仕事で忙しいといっていたが、実際はあの女性と逢っていたのかもしれない。絵になる二人を見て胸が締め付けられた。

ようやく顔を上げた倅は、頬を押さえた。

頬に伝うものが何なのか、考える間もなく負の気持ちに飲み込まれる。

「苦しいよお。何これ、何なのお」

倅は閉まる喉を押さえ嗚咽していた。

「ごちそうになって悪いわね」

「いや、気にしなくていい。呼び出したのは俺の方だし」

友樹は女性と近くの懐石料理屋に来ていた。

「しかし呼び出したりしないで迎えに来てほしかったわ」

「悪かったよ、すぐにでも会うにはこうして落ち合うのが一番早かったから」

「そういえば最近、周りの女性を一掃したって聞いたけど本当？」

「ああ」

女性は箸の先に手を添えて、一口運ぶ。友樹は食事を口にはせず、頬に手を寄せて視線を逸らしていた。

「もしかして一人の女性に絞ったって事？」

「ああ」

友樹は、店内を見渡すようにしてお茶に口を付けた。明らかに照れていた。

その言葉を聞いた女性はみるみる頬を赤らめる。

「う、そでしょ。それって本当に？ 信じていいの？」

「何度も言わせないでくれ、結構恥ずかしいから」

テーブルの上にはリングケースが置かれていた。

「はいこれ。頼まれていたモノよ。そんなに好きなの？ 彼女の事が」

「そうだな。彼女と交際したいし、結婚も考えている。彼女といると楽しくてね。ずっと一緒に居たいと思えるのは彼女が初めてで……。あ、姉貴。このことは両親に言わないでくれよ」

「いやだ、まだ交際すらしていなかったの？ 友樹にしては珍しいわね。分かってるわよ、余計なことと言わないわ」

友樹は姉に『彼女のフリ』を頼んでいることを説明するのが面倒だった。姉におもちゃにされるのは目に見えていたからだ。

リングケースを持ち上げ、姉は友樹を見据えた。

「これ、無駄にならないようにしてよね。私の力作なんだから」

「分かってるよ」

友樹の姉はジュエリーショップを経営していた。可愛い弟の為に世界にたった一つのデザインを手掛けていた。

「その彼女が未来の義妹になることを祈ってるわよ。ようやくあんたも結婚する気になってくれて私は嬉しいわ。だけどあんたぶつきらぼつなんだからもう少し優しく接しなさいよ」

「……うるさいな。そういう所はお袋そっくりだよな」

この手の話になると、くどくなる友樹の性格を理解していた姉はすぐさま話をすりかえた。

「エスターテを預けるとき、たまにはうちでゆっくりしていきなさいよ」

「だから、勝手にあの犬に名前を付けるなって言ってるだろ。そういや、あの犬の名前は『おい』だった」

「……おい？」

「そう思い込んでいるらしい」

友樹は不機嫌そうに食事を口に運んだ。その瞬間、友樹の姉は目を見開き、顔を覆った。

「ああエスターテ……、何て可哀想なの。こんなひどい名前を付ける弟を許して。ところで子供に名前を付けるときはちゃんとした名前を付けてあげなさいよ」

「話が飛び過ぎ。子供にはちゃんとした名前を付けるのは当然だ」

姉を駅まで送り、友樹はリングケースを見つめた。すぐにでも渡したい衝動にかられるが我慢した。

友樹はずっと倅の事が頭から離れなかった。日を増す毎に思いは募るばかりだった。今すぐにでも会いたい気持ちをおさえていた。今会つと、倅を束縛してしまいたいそうだった。

束縛、その言葉が脳裏によぎった瞬間から倅に何かプレゼントをしたかった。どうせならずっと身に付けてもらえるものを。指輪なら虫よけにもなるだろう。プレゼントを受け取らせる方法ならいくらでも思い浮かぶ。

だが贈り物をしたからといって、倅の心を掴めるとは到底思えなかった。

そう簡単に落ちない女性を選んだ事に対しては自信がもてる。そんな相手なだけに、下手な行動は逆効果になりかねない。

難しい。

自分に振り向かせるにはどうしたらいいのか、友樹は頭を捻っていた。

## 第十八話

残業中、倅は目の前で鳴り続ける電話を睨み付けていた。この電話を掛けてきているのが友樹からだと思感じた。

恐る恐る受話器を取り、耳に当てる。

「はい、経理課です」

「倅か？ 仕事を頼みたいのだがいいか？」

こんな直感はいらないと、倅は脱力した。

「今日は無理です」

「なぜだ」

いくら仕事とはいえ、しばらく友樹に会う気分になれなかった。断つてもそう簡単に引く相手だとは思っていなかった。

今日は残業している人間が多く、ここで電話を続けるのは難しいと判断した。断る理由を考える時間も欲しかったので、倅は携帯電話から掛け直す事にして通路へと移動した。

頭の中で理由を復唱しながら発信ボタンを押す。ワンコール目で友樹が出た。

「今日はそつち系の服装じゃないので今度にしてもらいたいですけど」

「や、格好は気にしなくていい」

嘘よりも正直に話した方が早いかもしれない。倅は携帯電話を左から右に持ち替えた。

「というより、気分が乗らないんです。仕事なのにすみません」

頭を軽く下げた後、終話ボタンを押した。無意識に体の力が抜ける。

寂しそうな声を出してたな。

断ることが出来て、倅は気が楽になっていた。

出ばなをくじかれ、友樹は愕然とした。今までなら必ず呼び出しに応じてくれていたのが、今回に限ってまさか断られるとは考えもしなかった。

プレゼント作戦を決行するためにわざわざ雰囲気の良いさそうなレストランの予約まで取っていた。少しずつでもいいから自分に好意を持ってもらう為に。

手元に置いてあったリングケースを両手で握りしめ、そのまま額に押し当てて唸り続けていた。

「寄り道でもしようかな」

口元から吐き出された白い息が、ふわりと消えていく。

それを見届けていると、視界に見慣れた車が飛び込んできた。途端に体温が上昇した。友樹の車に似ている。それだけでいちいち心

臓が反応する。

今は関連するものを見たくない。気晴らしに駅方面へと足を向ける。

突然その車からクラクションを鳴らされ、驚いて振り返ると運転席から男が出てきた。その姿を見た瞬間、倅は目を逸らした。

うわっ、友樹だ。

自然と顔が歪み、胸の奥に不快なものを感じた。

「倅？ おい、待て！」

倅は無意識に走り去ろうとしていた。その腕を既に掴まれていた。

「送るから乗れ」

「いいです、送らなくて！ 社長がたかが平社員に何しちやってるんですか。とにかく今日は放っておいて下さい！」

「なんだ、その言いぐさは」

倅は俯いたまま、顔を上げようとしなかった。

様子のおかしい倅に気が付き、友樹は手の力を緩めた。

「具合でも悪いのか？」

「悪いです。とつても」

「それはすまなかった。だったら尚更送る。乗れ！ 社長命令だ」  
「……嫌です」

あの女性に乗った助手席になんて乗りたくない。

「一人で帰れますから。社長も仕事で疲れているでしょうからたまには直帰したらどうですか」

「つべこべ言わずに乗れ。顔色が悪いぞ」

助手席のドアを開けられ、押し込められそうになった倅は車の縁に手を掛けて抵抗した。

「乗りたくないんですってば」

「具合が悪いやつを放っておけるか。乗れ。じゃあ後ろのシートで横になっていいから。とにかく送る」

無理やり後部座席に倅を押し込むと友樹は車を走らせた。

「気分が悪くなったらすぐに言え？」

「……はい」

具合なんて悪くないのに。それすら否定するのめんどくさくも良かった。下手に言葉を発してしまうと何を口走るか自分自身でもわからなかった。

もう、具合の悪いフリでもしよう。

倅は鞆を抱きかかえて、シートに横になった。

友樹が心配そうに倅に声を掛けた。

「俺のうちに寝るか？」

「……結構です。自宅で安静にしていれば良くなると思いますので」  
「わかった」

感じが悪い態度を取っていると自分自身でも思った。友樹と一緒にいるだけで口が勝手に憎まれ口を叩いてしまう。

最悪。

早く一人きりになりたかった。数分足らずで自宅周辺の風景が窓越しに飛び込み、ようやくアパートの前に到着した。倅は車が停車



したのを確認してからゆっくりと体を起こした。

「倅、着いた」

その声と同時に後部座席のドアが開かれた。

「ちょっと!？」

友樹は倅の体を引き起こし、手荷物を取り上げた。友樹は自分のコートを倅に羽織らせて、アパートへ同行しようとしていた。

「自宅は目の前なので、もう大丈夫ですから！」

「家に入るまでは安心できない。辛そうな顔をしておいて何が大丈夫だ」

友樹の瞳が『見届けるまでは帰らない』と言っている。ここで押し問答をするよりはさっさと自宅前まで送ってもらった方が早そうだ。倅は友樹を無視して、歩きはじめる。アパートの部屋の鍵を取り出して玄関の電気を付けた。

「もう大丈夫ですから。有難うございましたああ!？」

突然友樹に肩を押されて、足がもつれた。友樹も玄関に入り込んで扉を閉めた。

「なっ、なっ……、え!？」

「さっさと寝間着に着替える。台所を借りるぞ」

靴を脱いだ友樹は振り返ることなく、台所を物色した後、何かを作り始めた。

「お、送るだけじゃなかったんですか!？」  
「早くしろ!」

剣幕にあおられ、倅は死角となる部屋の隅っこで言われるがまま着替えを済ませ、台所を覗き込む。大きな背中をこちらに向けながら、小さな台所で何かを火にかけていた。

「倅、こつちを見てないで部屋をさっさと暖めておけ。終わったら定位置に座って待つてろ!」

声に驚いた倅は飛び跳ねて、部屋のエアコンをつけて、いつもの定位置にちょこんと座る。

なんでこんなことになってるの？

首を傾げていると、友樹が皿に何かを入れて運んできた。

「味には自信がないが、これを食べて早く寝ろ」

手渡された皿の中には卵粥が盛られていた。視線を友樹に戻すと、むっとした顔をした。

「なんだよ、その顔。一応料理は出来るっていっただろ」

食を誘う香りが漂う。倅の胃袋が反応し始める。

倅が皿をぼーっと眺めていると友樹がその皿を取り上げ、スプーンを手に持ち、構えた。

「食べさせてもらいたいのか？」  
「違います! いただきますっ」

お皿とスプーンを友樹の手から奪い取り、ゆっくりと卵粥を口に運んだ。それはとても美味しかった。具合が悪いわけではないのに、友樹がそう信じているのだと思うと心苦しかった。

友樹は倅の顔を見て微笑んでいる。緩みきった表情に、心が恋の病に冒されそうだった。深い傷を負っていた胸の奥が、みるみる癒されていく。スプーンを口にくわえて、にやける顔をこまかした。

「見られてると食べにくいんですけど」  
「ああそうか」

テーブルについていた肘をはずし、もう片方の肘を乗せて違う方向に視線を逸らしてくれた。その隙に倅は卵粥を冷ましながら味わった。

「美味しかったです。ごちそうさまでした」

お礼を言うと友樹は笑顔で応えた。そして立ち上がり、倅のベッドの布団を剥いでみせる。その行動に倅は目をぱちくりさせていた。

「寝ろ」  
「……え？」

倅は正座をしたまま友樹の顔を見上げた。

「横になれと言っている!」

びよこんとベッドに飛び乗り、横になると友樹は倅に布団を掛けた。

横になった倅を見て安堵の溜息を漏らし、友樹は倅の頭をひと撫でした。愛おしそうに見つめられ、倅の体は熱くなる。

「顔が赤いな、熱があるのかもしれない。沢山寝て、早く元気になれよ。あ、寝かせておいて何なんだが、戸締りだけはしっかりしろよ」

友樹は、その言葉を残して静かに部屋を出て行った。

戸締りだけでなく、コンタクトレンズも外したいし、化粧を落としてお風呂にも入りたい。けれど布団から出ることが出来なかった。

倅は布団を更に顔まで持ち上げ、撫でられた部分に触れていた。

「何なの、あの行動」

優しくしないで。

そう思う反面、嬉しさが込み上げる。体は気持ちに正直で、耳と頬を紅潮させた。心は確実に病に冒されていた。

ベッドの横に置いてある友樹が取ってくれたぬいぐるみを手に取り、それを抱きしめた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9110y/>

---

恋人代行

2011年12月19日00時49分発行